

---

# 名探偵コナン～君を愛しています～

吉田小杉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名探偵コナン〜君を愛しています〜

### 【Nコード】

N8137S

### 【作者名】

吉田小杉

### 【あらすじ】

黒の組織に見事勝利し、運命を大きく変えた二人。

二人の出す、これからの人生の進む道は？

共に戦うことで最初は何も想っていなかったお互いの心に変化が生まれはじめたのか？という話です。



## プロローグ 幸せへの長い道のり（前書き）

名探偵コナン初投稿です。

大好きなキャラクター、コナンと新一と、哀と志保の話です。

灰原より蘭のほうがいい！という方は全く腹だたしい話かもしれませんが。

俗にいうコ哀、新志という感じですか。

## プロローグ 幸せへの長い道のり

俺の名前は江戸川コナン。見た目は完全に小学校一年生だが、本当は工藤新一って名前の結構名前の売れている高校生探偵だ。友人で幼馴染みの蘭と遊園地に行ったとき、ある事件に巻き込まれ体を小さくされてしまった。

私の名前は灰原哀。紹介できるほど今までいい人生を送ってきたつもりもないけど、一応こう見えても18歳、科学者よ。

ある組織の存在が二人の運命を大きく変えてしまいました。運命だと諦めかけた瞬間もありました。倒すべき相手のあまりの大きさに挫折感を味わったことも何度もありました。命の終わりを実感した瞬間もありました。

誰にも助けを求められない過酷な状況で二人はいつも前を向きながら運命に立ち向かいました。

この話は二人がこんな過酷な運命に打ち勝ち、自由を手にした少し後のお話です。

## プロローグ 幸せへの長い道のり（後書き）

駄文、乱文失礼いたしました。

何か感想が生まれましたらぜひよろしくお願いいたします。

## 1・運命を掴んだ瞬間（前書き）

1話目です。

何かシリアスですが、軽い感じでいこうかと思っています。



## 1・運命を掴んだ瞬間

黒の組織に勝利したのは俺が江戸川コナンとしての人生をスタートさせて1年を過ぎたころだった。

最初にウオツカがFBIの手によって捕まり、自供したことによりボスをはじめ、幹部連中を中心に芋づる式に逮捕できたことが組織崩壊に大きくつながった。

しかし最後に立ち上がったのはやはりジンだった。

「やはりてめえが工藤新一か。」

「ああ。お前にこんな体にされちまったけどな。」

「ふん。まさか死なずに小さくなって生きてるとはな。さすがに誤算だったぜ。ってことは隣にいるガキはやっぱりシエリーか。久しぶりだな。」

「……もうあなたたちは終わりよ。それを一番わかっているのはあなたなんじゃないの？」

「フンツ。相変わらず冷めた女だな。まあそんな所が気に入ってたんだがな。」

「さあ！大人しくFBIに捕まって、今までお前たちが犯した罪を洗いざらい吐きやがれ！」

「ふん。馬鹿なことを。自分のことは自分で決める。」

長い間、戦ってきた相手との最後の対峙。しかしその時間は一瞬にして終わった。

「小僧。一つ忠告しといてやる。あまり余計なことに首をつっこむと次は死ぬぜ。……………シエリー。離れていても俺達に怯えていたのが想像できるぜ。てめえは本当は弱い奴だからな。だが安心しろ。今、お前に恐怖を与えている根源は消えてなくなる。」

ドオオンー!!

ジンは隠し持っていた拳銃を自分のこめかみに押し付け引き金をひいた。

予想外というほどではなかったが、突然の出来事に二人は驚いた。  
しばらくするとコナンは小さく息を吐き、

「終わったな。灰原。」

「ええ。そうね。長かったのか短かったのかはわからないけど。」

~~~~~

コナンと灰原は現場から立ち去りFBIのジョーディの車の後部座席に座って帰路についていた。

しかしコナンは灰原の異常なテンションの低さに憤りを感じていて、阿笠邸まであと25分といったところでついに不満を直接ぶつけた。

「お前、さっきから何なんだよ！下ばっか回いてよ！やっと終わったんだから少しは喜べよ！」

「あら？本当に終わりにしたいんなら私も殺さないといけないんじゃない？」

灰原はニヤツと薄い笑みを浮かべ、自虐的にそう答えた。

「バーロオ！！何言ってるんだよ！まだそんなくだらねえこと言ってるのかよ！組織も崩壊して、ジンも死んだ！完全に終わったんだよ！」

「終わってないわよ！！まだ、……まだ、あなたは工藤新一に戻って  
ていないじゃない！戻すことが出来る解毒剤を私は作ることができ  
ていないじゃない！」

灰原は途中から涙をこぼしながら大きな声で思っていたことを全部  
吐き出した。

「灰原……」



「あなたは探偵としてFBIと協力をしながらも組織の居場所をつきとめ、崩壊までの糸口をたぐりよせた。でも私は科学者としてあなたを元に戻す解毒剤を全く作れていない。たまに完成したと思っ  
てみても中途半端な失敗作ばかり。おまけにあなたは免疫がついてきて元に戻る時間も毎回短くなってきた。それに完璧な解毒剤が完成するまでこれからどれだけの間がかかるかもわからないのよ！そんな状況をずっと私の近くにいるあなたなら本当はわかっているんでしょ？何であなたは私を責めないのよ！？もっと私のことを責めてよ！」

泣きながら俺の胸を叩き、「責めてよ」と訴え続ける灰原を見て、こいつが今までどれだけ苦しみながら生きてきたのかが少しわかったような気がした。きつと俺の体を小さくしたことの罪悪感の大きさからかなりプレッシャーも感じていたのだろう。それに組織について自分の正体がバレて周りに被害が及ぶか。

そんなことをずっと考えて生きてきたのだろう。

「おめえだからだよ。」

「えっ？」

灰原はいきなり言われた言葉の意味がわからず、フッと頭を上げ、コナンのほうを見た。  
するとコナンは優しい笑顔で灰原を見つめていた。

「…お前だったから。体が小さくなっちまって、組織にも立ち向かっていかなきゃいけねえ。そんな厳しい状況を分かち合うことが出来た運命共同体のような存在が、…誰よりも優しいお前だったから俺は前を向いて戦うことが出来たんだよ。前から言ってるんだろ。お前は俺の相棒だぜ？」

コナンはそう言って灰原の涙を自分の小さな指で軽く拭いた。

「でも！あなたには帰る場所がある！家族もいる！………それに大切な人もいるでしょう！？その人達の所に帰るためにもあなたは早く工藤新一にならなきゃいけないじゃない！」

「いいんだよ。親はちゃんとわかってくれてるし、家だって別に気にしてねえよ。」

「それに、…正直今はそんなに戻りたいって思わねえんだよ。」

「えっ？嘘よ！！そんな気休めいらないわ！」

そんな優しい嘘でこれ以上惨めな思いはしたくなかった。私は責められて責められて、蔑まれなければならない存在。

「いや、それが本当なんだよ。ていうか戻っちまうと俺の中で今一番大切な存在になっちまってるもんと離れちまうんだよ。これは嘘でも何でもない。俺の本音だ。」

コナンは何故か顔を少し赤くしてそう呟いた。

灰原なコナンの言ってる意味が全くわからなかった。

(工藤新一になると一番大事なものと離れてしまっ？それってどう  
いう意味？

でも嘘を言ってるようには見えないし。ていうか何で顔が少し赤い  
のよ。)

灰原は心の中でそんなことを考えていたのだが、答えは全く出な  
かった。

「何よその一番大切なものって？それが何で元に戻ると離れるのよ？全然意味がよくわからないわ。」

灰原はあまりの意味のわからなさについての間にか涙を止めて、コナ  
ンに素朴な疑問を投げ掛けた。

「バーロオ！そんな恥ずかしいこと言えつかよ！！知りたかったら自分の胸に手あてて聞いてみやがれ！……あー！もうこの話は終わりだ！」

「はあ？ちょっと待って何よそれ！？意味がわからないわ！説明しなさいよ！」

そんな二人のやり取りを前で運転しているジヨディは楽しそうに盗み聞きしていた。



(くー！何かいいワネー！すごく暖かいものを見た感じだわ)

そんなことを思いながら1人ずっとニヤニヤしていたら、阿笠邸に  
やっと到着した。

「やっと着いたぜー！あー疲れた。おい灰原。今日はもう遅いし俺  
も博士んちに泊まっていくぜ？」

「別に。好きにすればいいんじゃない？まあ確かに時間が遅いしね。毛利探偵事務所には博士から連絡してもらえばいいんじゃない。」

そんな会話をしながらコナンと灰原は車から下りた。

「じゃあジョディさん。ありがとう。よかったね解決できて。お休みなさい。」

「ええっ！あなたたちの協力がなければ組織をつぶすことはできなかったわ。本当に感謝してる。ありがとう！クールガイ！」

「あの、ありがとうございます。色々すみませんでした。」

「いいのよ。あなたは何も悪くない！すべて終わったしね！じゃ！二人ともお休みなさい！」

「「お休みなさい。」」

「あつ！ちょっと待ってクールガイ！ちょっとこっちして耳貸してくれない？？」

ジヨディはコナンだけを手招きで側までこさせて耳打ちで何かをいい始めた。灰原はそれを不思議そうに見つめていた。

「クールガイ！レディに愛を伝えるにはあんな言葉じゃ全然たりませーん！もっと積極的にいかなきゃダメよ！」

「なっ！何言ってるんだよ！？俺は別にそんなんじゃない…！」

「まあまあ。小さな二人のラブストーリー、楽しみにしてるわよ！  
じゃあね！」

そういつてコナンから離れていき、車に乗り込んでジヨディは去っていった。

「ジョディさん何て？」

灰原は二人の秘密話が気になりコナンに聞いてみた。

「バーロオ！何でもねえよ！お前には関係ねえ！」

「…？何怒ってんのよ？」

「組織に勝利し、自由を手にいれたコナンはようやく訪れた戦いの終わりに安心しきっていました。」

哀ももう組織に命を狙われることはなくなったので少しは肩の荷が下りたようですが、やはり薬の未完成がずっと気になっているようです。

それぞれが今までの状況と少し変化していくなかで二人の関係も少しずつ変化していきます。



## 1・運命を掴んだ瞬間（後書き）

ありがとうございました。次からはちょっと事件的なことは無しでいきたいです。

またよかったらお願いします。

## 2・終わりの次は始まり（前書き）

なかなか話が進まないです。少しだけコナンがぶっちやけしますが。

## 2・終わりの次は始まり

「あー。久しぶりによく寝たぜ。昨日は色々あったからなあ。」

翌日コナンは阿笠博士の部屋で目覚めた。あのあと色々、灰原から『さっきの何だったのよ！ていうか何か隠してるんじゃない？』などと問い詰められたが、コナンからすると素直に話せる訳もなく、疲れもあってかすぐ眠りについてしまった。

（しかし、ジヨディ先生には完全にバレてたな。そんなに俺、態度に出してたか？）

などと思いながら、背伸びをし、縮こまった体を伸ばしながら部屋を出た。

「あら、やっと起きてきたの？ずいぶんゆっくり寝てたのね。名探偵さん。」

灰原はリビングで何か作業をしているようだったが、コナンを見かけると、ニヤッと笑って皮肉まじりに声をかけた。

「おーおはよう灰原。腹へったなあ。」

「何がおはようよ。もうお昼よ。お腹すいたならそこにござ飯おいてあるから食べなさいよ。」

コナンはそう言われてテーブルの上を見ると、きれいに盛り付けられた料理が並べられていた。

「ん？おーすげえな！何だこれ誰が作ったんだよ！？」

「博士がそんなの作れると思つのかしら？いいから早く食べなさいよ。」

「お前つて料理出来んだな。まあ確かに博士の健康管理もきつちりやつてるもんなあ。」

「いちいちうるさい人ね。食べるの？食べないの？」

「いただきまーす!!」

コナンは灰原の機嫌が若干悪くなってきたのを感じ、急いで料理を口にした。

「何だこれ?うめー!!お前料理上手いなあ!ちょっと意外だぜ。これぐらいのもん作れるんだったらお前いいお嫁さんになれるぜ!」

コナンは予想外に美味な料理にテンションをあげながら灰原に失礼なほめかたをした。

「あら？悪かったわね。料理の出来なさそうな女で。見た目通りに料理に毒薬でも混ぜればよかったのかしら？」

灰原はコナンに誉められて一瞬、頬を赤くしたが、すぐに後ろを向き顔を隠しながら思い切り言い返した。

「ははっ。そんなつもりじゃねえけどよ。」



(しかし、うめえなこれ。蘭の料理もかなりうめえけど、ちょっとレベルが違つぜ。)

コナンはそんなことを考えながら箸をすごいスピードで進め、すぐに全部を平らげた。

「いやー！すごそうさん！美味かったぜ！」

コナンはそう言って満足そうに灰原に礼を言った。

「それはよかったわね。じゃあ片付けるからそこちょっとどいてくれる?」

灰原はよほど早く片付けたかったのかそう言いながら食器をまとめて台所に運んだ。コナンは何か邪魔しちゃ悪いなと思いつつソファのほうに移動し、テレビをつけしばらくボウツとしていたのだ

が、しばらくすると大きな音が聞こえてきた。

ガシャーーン。

コナンは台所から物音がしたので駆けつけると、灰原が食器を落としてしまい、何枚か割れたお皿を手で拾おうとしていた。

「ごめんなさい。ちょっとやっちゃったわ。すぐ片付けるから戻って来ていいわよ。」

「バーロオ！あぶねーじゃねーか。俺も手伝うから割れた皿に触るなよ！」

そう言ってコナンは灰原の手を捕まえて、パッと灰原のほうを見た。灰原を見たことに特に理由はなかったのだが、顔を見た瞬間コナンは驚いた。

「お前何だよその顔？目の下すげえじゃねえか！もしかして寝てねえんじゃねえか？」

「別にいいじゃない。ちょっと疲れてるだけよ。」

「お前、もしかして夜もろくに寝ずに解毒剤の研究してんじゃねえだろな？」

「だから別にいいじゃない！私は早く薬を完成させたいの！」

「何だよ！？昨日あせんってあれだけ言ったじゃねえか！」

「…私にはそうすることでしか罪を償うことは出来ないのよ。だから寝てる暇なんてないし、ゆっくりり休む権利なんてないのよ。」

灰原はコナンにどれほど言われてもこれだけは譲れなかった。自分の開発した薬でどれだけ迷惑をかけたか。早く完成させることが自分の絶対の使命。

「わかったよ。お前の気持ちはよくわかった。一応確認の為に聞か  
がおめえは自分が作った薬で俺を小さくさせてしまったことを申し  
訳なく思ってたんだな？という事は俺のためにそうまでしてくれて  
んだよな？」

「まあ言い方はあまり気にいらないけどそういふことかしら。……」

…あなたが言いたいのよ？」

最近のこの人は何を考えてるのかよくわからない。普段はわざわざこんなこと言わないし、さっきからちよつと顔が笑っている。

「じゃあ償いとかがそんないいから一つだけ俺の言うこと黙って聞いてくれねえか？」



コナンは笑いながら灰原に問いかけた。『悪いと思ってるなら一つぐらい言うこと聞けよ』と言いたげに。

「何よ？わかったわよ。少しでもあなたに対する償いになるならね。で？何を聞けばいいのよ？」

「今から俺が言うまで薬の研究はやめろ。」

「はあ？何バカなこと言ってるのよ！あなた本気で戻りたくないの？昨日から少しおかしいんじゃない！？」

「まあまあ。何も完璧にやめろって言ってるわけじゃねえよ。薬の研究に費やしてる時間を少なくしろって言ってんだよ。特に夜！晩飯以降は研究ナシ！どうだ？これぐらい灰原なら守れるだろ？」

コナンは自信満々に灰原に提案してみたが、灰原はものすごくコナンのことを不思議そうに見ていた。『この人頭おかしいんじゃないの？』みたいな目で。

「それはできないわ。まだまだ調べなきゃいけないこともたくさんあるの。そんな悠長なこととは言ってられないのよ。」

「悪いと思ってないのか？」

「なっ！」

コナンは灰原の反論に対して弱みにつけこむ言い方をした。

「…わかったわよ。あなたどうなっても知らないからね。でも一つだけ教えてくれない？何でああなたは早く戻りたいと思わなくなったの？小学校としての生活が楽しそうにも見えないし。」

灰原宿は昨日からずっと抱いていた疑問をまたぶつけてみた。あれだけ早く戻りたいと言っていたのにこの変わり様々は予想外すぎる。

「じゃあ逆に聞くけど灰原。おめえは解毒剤が完成したら俺と一緒に元に戻るのか？戻るって言いつてくれるんなら俺は何も言わねえけど。」

「……それはわからないわ。元に戻った所であなたと違って待つてくれている人もいないし。戻るメリットは特にないわね。」

「だからだよ。」

「はあ？」

昨日からこの男は何が言いたいのかわからない。全く話も見えてこない。

「…灰原。高校生と小学生がずっと一緒にいちゃ変じゃねえか？で

も小学生同士が一緒にいても別におかしくねえだろ？」

もう知らない。話を最後まで聞いてみよう。

「それはそうだけど。それが？」

「高校生に戻るってことはお前と全く立場が変わるよな？お前は元に戻る気があんまりねえんだから。」

（それはそうね。）

「まあそうなるでしょうね。」

「……………俺はお前とずっと一緒に、側にいたいんだよ。」



## 2・終わりの次は始まり（後書き）

ありがとうございました。話に奥行きがないですね。笑

中途半端に終わりましたが、だいたい3ページぐらいが限界なのでやめておきます。

3・幸せを見せてくれる人(前書き)

少し短いです。

誤字脱字に気をつけてみました。

### 3・幸せを見せてくれる人

「えっ？あなた何を言っているの？」

『お前とずっと一緒に、ずっと側にいたいんだよ。』

コナンの口から突然言われた言葉に灰原は驚きを隠せなかった。

「そのままの意味だよ。俺はおめえと一緒にいたいんだよ。」

「なぜ?」

「何でだろうな。俺もよくわかんねえ。ただ一度想像してみたんだ。もし元の体に戻ったとして、コナンになる前の人生に帰ったとする。それはそれで楽しくて良い人生だと俺も思う。…でもよく考えるところにはお前がいねえって事に気づいたんだ。何か…それが無性に寂しくなっちまってよ。だから多分俺はやっぱりお前が必要なんだよ。」

灰原はコナンの真剣な答えをただただ聞いていた。抑えきれないぐ  
らいの胸の高鳴りと驚きが入り交じった初めての感覚に襲われなが  
ら。でもだからって灰原はすぐに素直な女の子になれるというわけ  
ではない。

「きつ、昨日も思ったけどよく女の子にそんな齒の浮くような気障  
なことを言えるわね。私はあなたの事をかなりの恥ずかしがり屋で  
奥手だと思ってたけど、意外にプレイボーイだったのかしら？」

灰原は胸のドキドキを隠せないまま、コナンに冗談混じりの返答をした。顔が今までにないくらい赤くなっているのがコナンにバレないように下に落とした食器を片付けながら。

「バー口。誰がプレイボーイだよ。つつか俺にこんな恥ずかしいこと言わせてんの誰なんだよ。」

自分でもそう思う。何で私はあなたの口からこんなにも嬉しい言葉を言われているんだろう？

何気ない時間が幸せな一瞬に感じられるような。

……でも自分の現実が一番よくわかっているわ。

ただそれでも今はこの時間の中に浸かっていたい気分になってしまっているの。

「バカ。工藤君。あなたのせいよ。」

そういつて灰原はコナンの頬にそっと口づけをした。

ほら。柄にもないことしてしまったじゃない。

コナンは驚いて目を見開いた。

「おいつ！？いきなり何すんだよ！」

「あら。プレイボーイの名探偵さんならこんな慣れっこじゃないの？」



「だからプレイボーイじゃねえって言うてんだろ。」

コナンは顔を真っ赤にしながら反論した。あれだけ必死に頑張って想いを伝えたのにプレイボーイ呼ばわりは納得がいかない。

「ふー。わかったわ。あなたの言う通り、薬の研究は控えるわ。でも一つだけ言わせて。あなたにどんな心変わりがあったのかはわからない。けど、…それでもあなたは蘭さんの所に帰るべきよ。」

灰原は真剣なまなざしでコナンに言った。

ずっと工藤新一の帰りを待っている蘭さんのことを考えると自分の幸せな気持ちを閉じ込めて生きていくしかない。それは仕方のない事。

そう私は思っているのに。こんな時、あなたはいつも私の考えを甘く優しいほうへ否定してくれるわね。

「蘭との事はしっかり考えてけじめをつけるよ。だから灰原、もしお前が俺を必要だと思ってくれてるなら、くだらねえ事を考える前に、自分の気持ちを消さないでくれ。」

そういう優しくてぶっきらぼうでちょっと気障な所に私はすごく惹かれたのよ。その不器用な優しさにどれだけ私は救われたかわからない。

「わかったわ工藤君。ちゃんと考えるわ。」

あなたはいつも私に光を。  
幸せを見せてくれる。

闇の中で死と隣あわせで生きてきた私がどれほどあなたに救われて

きたか、あなたはきつとわかってないでしょ？

幸せになりたいのか幸せになってほしいのか。

灰原はずっと悩み続けていました。

でも今日コナンが灰原に向けて強烈な光を与え、幸せに向いて歩いていく決心をしました。

### 3・幸せを見せてくれる人（後書き）

ありがとうございました。

前に進みましたよね。

ネタがもう全くないので『こんな感じで話続けるや』みたいな感想、大歓迎です。

#### 4・好きという言葉（前書き）

こんにちは。何だかんだでもう4話目です。

ちょっと更新をとめて他の人の小説読んでみてるのですが、やっぱり凄いですね！どの方もむちゃくちゃ面白かったです。

パクりすら出来そうにないくらいレベルの違いを感じました。

低レベルな自分の作品、読んでいただけたら幸いです。

#### 4・好きという言葉

コナンは今、多少強引な手ではあったが灰原哀に想いを伝え、何とか心が通じあった日のことを思い出していた。

思い出すと言ってもまだ二日前の話であるが。

〈二日前〉

「じゃあ灰原。床に落ちた食器さっさと片付けようぜ。」

そう言ってコナンはてきぱきと食器を片付け始めた。気障な台詞を

言ったことに後から気恥ずかしさがきているのだろう。そんな時、灰原が追い討ちをかけてきた。

「ふふ。さすがプレイボーイの名探偵さんね。」

「だからプレイボーイはやめろっての。ていつか何がだよ?」

コナンはいきなりちょっと予想外のことを言われ、驚いた。何がさ



すがなんだ？

「女の子に想いを伝えるのに『好き』の一言もないのね。やっぱり  
プレイボーイの男の子ならそんな言葉は言わなくても大丈夫って感  
じなのかしら？」

灰原は嫌らしく笑いながら皮肉たっぷりコナンに言い放った。ふ  
とコナンを見ると顔に汗をかきながら完全に固まっていた。

（まあ、私にとってはそんな言葉は必要ないくらいに甘くて嬉しく  
てたまらない告白だったけど。まあでもそんなことは恥ずかしいし  
何か悔しいから絶対言ってあげないけど。）

灰原はそんなこと思いながら固まっているコナンを優しく見つめていた。

(やべー。俺、好きって言ってなかったのか？テンパって訳のわからない告白しちゃったのか？)

「ちょっと。いつまでそこにいるの？いい加減邪魔よ。」

灰原の一言でコナンはパッと目が覚めたように辺りを見渡した。ど

れぐらい固まっていたのかわからないが、もう皿の片付けは終わっていた。

コナンは辺りを見渡し、ソファアールで雑誌を見始めようとしていた灰原を発見し、何か決心したように灰原に近づいた。

「灰原！」

コナンは灰原を呼び、いざ告白しようとした瞬間、

「何よ？先に言っとくけどやり直しの告白なんかロマンティックさの欠片もないからいらないわよ？」

灰原は冷たい視線でコナンにきつい一言を言った。

（面と向かって『好き』なんて言われちゃ甘すぎて頭おかしくなり  
そうだわ。）

本当はそんな可愛らしい理由が本音だったのだが、やはり素直には  
なれなかった。しかしコナンはそれを真に受けて相当焦っているよ  
うである。

「ぐっ！」

コナンは言おうとしていたことが言えなくなり、焦り始めていた。いつもはどんな状況に陥ってもキレのある推理で饒舌に言葉を発しているのだが、今は何を話していいか全くわからなくなって、また灰原の前で固まっていた。

そんなコナンを見て、灰原は小さくため息をついた。

（もう、しょうがない人ね。私だって恥ずかしいのよ。）

そつ心の中で呟きながら、立ち上がりコナンに近づいた。

「工藤君。嘘よ。でもさっきので充分通じたからもう本当に大丈夫よ。」

そう言つて灰原はまたコナンの頬にチュッと口づけをした。

(この短期間に二回も彼にキスするなんて。私もかなり頭がやられてるわね。)

灰原は顔を真っ赤にしているコナンを見ながらそんな事を考えていた。

くそして今に至るく

「ちょっとコナン君。もう授業終わっちゃったよ!」

「そうですね!何さっきから上向いてニヤニヤしてるんですか?」

「そつだぞ!早く帰ろうぜ!おいっ。灰原も何か言ってやれよ!」

授業が終わってもまだ席を立とうとしないコナンに少年探偵団の三人はコナンに声をかけていたのだが、全く返答はなかった。

「(何をのぼせあがってるのかしら?この人は)……………ノ  
コメントで。」

あの日から二日経過し、もう江戸川コナン、灰原哀としての日常に戻っているのだが、コナンは未だにあの日の余韻に浸っていた。

しかし何度か歩美たちに呼ばれ何とか気を取り戻したコナンはやっ  
と皆と一緒に下校することになった。  
いつものように、前に三人、そして少し後ろからコナンと灰原とい  
う位置関係で。

「あなた、何を平和ボケしてるのよ？情けないわね。」

「バーロオ！してねーよ。さっきのはちょっと考え事しながらボ  
っとしてただけだよ！」



「あら本当かしら？また私との甘い時間でも思い出してるのかと思つてたけど。残念ね。」

「ちげーよバーロオ！んなわけねーだろ！変なこと言うんじゃないねえ！」

コナンはズバリの中され、焦りながら全力で否定したが、態度からしてバレバレだったため、灰原は盛大にため息をついた。

「まあ、あなたが何を思い出してるかなんて興味ないけどあなたこれからの事はちゃんと考えてる？」

「ああ。とりあえず毛利探偵事務所は出ようと思ってる。元々、探偵事務所にいれば奴等の情報が入ってくると思って居候してたからな。もう住み続ける理由はねえし蘭にも迷惑かけっぱなしだしな。」

コナンは一応これからの予定を灰原に話した。

「あら？それだけが理由じゃなかったと思うけど？」

「何だよ！それ以外ねえつての！」

コナンは全力で否定した。

最近、やたらと灰原は俺を茶化してくる。せっかく告白したつての  
にあれから特に何も進展はないし。

「まあどうでもいいけど。蘭さんのことはどうするの？いつまでも  
このまま待たせるつもりなの？私が気になるのはそこなんだけど。」

灰原は複雑な気分でコナンに尋ねた。

元々は自分のせいで引き離してしまった二人。でもコナンは自分に  
想いを寄せてくれていた様なので聞きにくい話題ではあるのだが。

あの天使のような、……自分の姉のような蘭が傷付く姿はあまり見

たくないと思った。

「おいつ。また気持ちが悪くなるほど進んじまってるぞ。あんまり余計な心配すんなよな。」

コナンは灰原の表情が暗くなっていくのに気づき、頭をポンッと軽くたたくように撫でながら声をかけた。

「とりあえず蘭には家を出るようには説明するよ。」

「……………任せろわ。」

「それより灰原。」

「何よ？」

「またキスしてえんだけど。」

「はあ？」

二人は理想と現実の狭間で揺れ動いていました。

理想というにはあまりにも問題が多すぎて。

現実というには少し甘く優しい時間が生まれてきている。

そんな微妙な雰囲気の中で二人は確実に急接近しています。特にコナンは灰原に一直線に溺れていくことになりそうです。

#### 4・好きという言葉(後書き)

最後までありがとうございます！

次回は、コナン君が毛利探偵事務所に別れを告げるといっ感じの話を書こうと思ってますが、暗くする気は一切ありません。  
新蘭好きはむちゃくちゃ腹立つと思いますが突っ走って話を進めません。

## 5・別れの日には花束を（前書き）

少し短めですが連続で投稿です。

よろしくお願いいたします。



## 5・別れの日には花束を

コナンは少年探偵団の皆と別れ、毛利探偵事務所に帰ってきた。

（今日、蘭にコナンとしての別れを告げよう。一応蘭だけじゃなく毛利のおっちゃんにも世話になったし、ちゃんとお礼を言おう。）

コナンは蘭、小五郎と三人でご飯を食べながらそう決心した。

（幸い、蘭も何故か機嫌が良さそうだしおっちゃんも酒に酔ってねえから言うなら今だ。）

「あの蘭姉ちゃん、おじさん、ちょっと話があるんだ。」

蘭は「どーしたの Conan 君？」と優しくこっちを向き、小五郎は「あー？」と言って新聞を見ていた。

「僕、そろそろここを出ていくよ。だから三人一緒にご飯食べるのは今日で最後なんだ。」

(言った！我ながらガキくさい感じだが！)

「えー！急に何でなのよ！？もしかしてパパとママが迎えにくるの？」

「そーだ！急すぎんだよ。ちゃんと説明しやがれってんだ小僧！」

蘭も小五郎も突然のことにビックリしている。

「迎えにくるのはもう少し先なんだけど、昨日電話があつたんだ。  
『いつまでも人の家に迷惑かけちゃダメよ。有希子さんにはもう話を  
してあるからこれから優作さんの家で暮らさない。あそこだつたら横に阿笠博士もいるし安心でしょ？』って。だからちよつとの  
間は新一兄ちゃんの家に住んでママが迎えにくるの待ってみるよ。」

（我ながら苦しい理由だぜ。蘭なんか心配して反対するに決まってるぜ。）

「何言つてんだバカ野郎！ガキ一人にあんなデカイ家で一人暮らしなんて出来るわけねーだろ！お前とこの親も何考えてんだ！！」

予想に反して心配してきたのは小五郎のみだった。

蘭は何故か下を向いて何かを考えてブツブツ言っているようだった。

「わかったわコナン君。寂しいけど仕方ないわね。じゃあご飯食べたら一緒に荷物まとめよっか？」

予想外すぎてコナンは声が出なかった。小五郎も『おめえも何を言  
つてんだ!』とか言っつてずっと蘭に怒鳴っている。  
だが蘭はその後ご飯を食べ終わるまで何も言わなかったし、何も聞  
いてもこなかった。

「さっ!片付けよっか?」

「うん!」

蘭とコナンはコナンの部屋で荷物をまとめはじめていた。当たり障  
りのない話をしながら。

(いくら何でも変だな。何も聞いてこねーな。せめてもう少し何か  
これからの事とか本当に一人暮らし大丈夫かぐらい聞いてきてもよ

さそうなんだが)

コナンはずっとそれを考えていた。まあ質問攻めされても上手に答えられるかどうかはわからないので困ることは困るのだが。

「あーこれ懐かしい！これも新一の小さい時の服だよね？」

蘭は一枚の服に異様に食いついていた。あれは確か、最初に持ってきたんだけど一回も着なかった服だ。

「あー。そうだね。確か有希子おばちゃんからもらったらしいんだけど何かあまり気に入らなくて全然着てないんだ。」

「ふうくん。コナン君もこの服好きじゃないんだ。」

「えっ？（まずい…）」

「新一もこの服全然着てなかったなあ。何かデザインが悪いとか何とか言ってる。一回だけ他の服は洗濯中とか言ってる着てきたことがあるから私も覚えてるんだけど。」

「そっそーなんだ。まああんまりかつこよくないしね。」

コナンは何かごまかそうとした。実際自分から見てかつこよくないのは事実だが。

「んー。まあ確かにちょっと派手だよ。でも何か懐かしいなあ。」

何か最近思うんだけど、懐かしいとか思い出さずときつてもちろん目で見て懐かしいなあって思うときもあるんだけど意外に匂いで思い出すことってない？」

（いきなり変な話になったな。しかも6歳の子供に思い出話とか普通はねーんじゃねーか。）  
とコナンは心の中で思った。だが、一つ知識があったので説明することにした。



「あー。それは普通なんだよ蘭姉ちゃん。思い出とかを司る神経は目で見たもの、視覚を通すと他の神経とかを経由して思い出すんだけど、匂い、嗅覚は直接思い出を司る神経にいくんだよ。」

「へえ。そうなんだ。」

蘭はポカンとしながら聞いていた。

「これは前にテレビで見たんだけどね。」

(ちょっとやりすぎたか？) コナンは一瞬そう思った。

しかし、そんなコナンの心配をすべて無にする一言を蘭は言った。

「さすがだね。……新一。」

## 5・別れの日には花束を（後書き）

ありがとうございました。

ちょっと、次回お楽しみに！って感じで終わりました。

感想などいただけたら嬉しいです。

## 6・君に逢いたくて（前書き）

蘭と新一の別れの話です。

ポップにしたつもりですが、やはり原作ではガチガチの主人公とヒロインですので真剣に書いたつもりです。

灰原は出番は少ないですが気に入っております。（自画自賛すみません）

## 6・君に逢いたくて

えっ…今、新一って言ったか？

確かに言ったよな？聞き間違えではなさそうだ。

「蘭姉ちゃん？今、新一って…」

「あなた…やっぱり新一でしょ！？もう何回も！何回も！何回も！何回も！何回も！何回も！もう完全に！揺るぎない自信と確信のもとで言わせてもらうけど！…あなた、新一よね？そうよね？」

語尾の「そうよね？」は完全に怒っていた。怒り狂った気持ちを必

死で押さえつけるように声のトーンを低くしていた。

「何言ってるの？蘭姉ちゃん。僕はコナンだよ。それに何回か僕と新一兄ちゃんが一緒にいる所見たことあ…」

「うるさいうるさい！どうせあんたの事なんだから博士とか服部君とか誰だかに頼んで上手い事してたんでしょ！？もうごまかせないわよ新一！」

(やべー！もうごまかす時間すら与えてくれねー！しかも今更だ  
けど怖えーよ！)

「……………蘭。」

俺はたった今諦めた。もう正直に言おう。よく考えたらもう俺の正  
体をバラして蘭に危険が及ぶこともねーし。隠す必要もない…か。

「今、…蘭って。やっぱりそうなのね？」

「ああ。俺の名前は工藤新一。ずっと隠してて悪かった。」  
「こいつに全て話して受け止められるだろうか？」

「やっと言ってくれたわね。…新一。」

「久しぶり…って感じでもないよな。」

それから俺は全てを蘭に話した。

あの日、トロピカルランドで起こった事。

薬を飲まされ小さくなった事。



黒の組織との対決の日々と決着がついた事。

…そして灰原の事も。

蘭は全て話し終わるまで黙って俺の話を聞いていた。途中で信じられないという顔をしたり、少し涙を流しながらそれでも真剣に話を聞いてくれていた。

「信じられないことも多いとは思いつけど今ここで話した事が全てだ。あの日俺と蘭が遊園地で別れてから今日までの全て。」

「…そう。大変だったんだね新一。話してくれてありがとう。…でも、やっぱりもっと早く話してほしかったな。話してくれるのが遅

すぎたね。」

「ああ。確かに今の今まで隠してきたことは悪かったと思ってるよ。全て終わってから話すかどうかは最近まで迷ってたつても本音だ  
けど。」

「本当…遅いよ。新一。」

（遅いってここにやたらと引っ掛ってるな蘭の奴。まあ解決するの  
に時間はかかったけどそんなに気にする所か？）

ふと蘭を見ると、何とか申し訳ないが変な顔をしていた。若干

だが顔は赤いし緊張しているような、それでいてちよつと悔しさという寂しさみたいなものも見える。しかしよく考えると先ほどご飯を食べている時、蘭はえらく上機嫌だった。何だっぺんだ一体？

「おい蘭。どうしたんだ一体？何か変だぞ。」

「新一。私、彼氏ができたの！！」

一瞬自分の中で時が止まった。何かすげえこと言わなかったかこいつ？

「えっ！？恋人？」

まさか俺じゃねえよな？蘭はそんな先走ったことを口にするような馬鹿な女じゃないのはわかってる。

「誰だよそいつは！？」

「……………新出先生。」

蘭は顔を真っ赤にして答えた。

「だって仕方ないじゃん！新一はいつまでたっても帰ってこないと思ってたし、コナン君が新一って確信してからも何かどう接していかかわからなかったし！」

「……………蘭。」

やっぱり俺のせいだよな。

「それに新出先生、凄く優しいし、頭も良いし…それにイケメンだし。新一も会ったことあるでしょ？そう思わない？」

「おっ、おー！あの先生は凄くいい人だと思うぜ。らっ、蘭ともお似合いだと思うぞ！」

何か蘭の奴、のろけ出したぞ。どんな顔して聞けばいいかわかんねーぞおい。

「ごめんね新一。私、弱いから新一のこと待てなかったんだ！」

…蘭。ごめんな。俺がもう少し早く解決してたら。  
でもその言葉、そんな幸せそうな感じで言う言葉じゃないと思うぞ。

「…蘭。何か幸せそうだな。良かったよ。」

新一は安心した。蘭が辛くなさそうで。逆に幸せオーラ満開で。

「ありがとう新一。でも、新一も私じゃない、大切な人がもっているんだよね？知ってるよ私！」

「えっ!?!」

いきなり蘭に痛いところを突かれた。何でバレてるんだよ。でも、蘭も新しい幸せな道を歩み始めてるんだからもう言ってもいいよな？

「ああ。俺にも今、大切な人がいる。」

「やっぱり！新一わかりやすいから。………お互い、幸せになろうね！」

蘭とこんなことを言い合う日が来るとは思わなかった。やっぱり……ずっと好きな、初恋の女の子だったから。でもお互いが幸せな道を歩んでいけるなら、歩み出しているのなら、こんな結末もありではないだろうか？

「ああ！今まで本当にありがとう蘭！」

「なーに言ってるのよ！私達は幼なじみなんだよ！それだけは死ぬまで変わらない事実だよ！」

「そうだよな！蘭、これからもよろしくな！」

「うん！」

「じゃあ俺、そろそろいくな。もうここにいるわけにはいかないしな。」



「そつだね。コナン君と過ごした日々も最高の思い出だよ。新一。ありがとう。」

江戸川コナンとしての人生は蘭のおかげで歩んでいけた。誰にでも誰よりも優しい蘭がいたから、得体の知れない子供を温かく迎えてくれたからずっとやっていくことが出来た。

「ああ。俺もだよ。ありがとう。蘭姉ちゃん。」

新一は半分冗談半分本気で蘭にそう言った。

「新一のバーク。何言ってるのよ。」

「はは。じゃあな。蘭。」

「うん。…新一。」

「何だ蘭？」

新一はふと蘭を見ると蘭は少し涙を浮かべながらあの頃の目で俺を見つめていた。

「新一。本当に好きだったよ。」

本当にありがとう蘭。

「俺も好きだったぜ。蘭。初恋をありがとう。」

そう言って新一は事務所の三階の扉を開け、毛利家をあとにした。

ひとつの思い出にサヨナラを告げて。

「あいつまだ起きてるかな。」

新一は阿笠邸に向かって歩いていく最中、夜空に浮かぶ月を見上げると灰原哀を思い出した。そして無性に声が聞きたくなり、気がつけば携帯電話を手にしていた。

何コール目かに「もしもし？」と不機嫌そうな声で灰原は電話に出てくれた。

「わりい。寝てたか？」

「寝てたわよ。誰かさんに研究を止められてるからね。」

灰原は少し笑いながら嫌みを言ってきた。そんな所も好きで好きで仕方がない。

声が聞けないときは声を聞きたくなる。

声を聞くと会いたくなる。

「これが恋なんだろうな。」

「はあ？」

無意識で思った事を口にしてしまった。それでもでも新一は清々しい気持ちのような、何か吹っ切れた気持ちが強かったのか、恥ずかしいという気持ちはなかった。

（ついでだからもう一言言ってみるか。）

「灰原。」

「何よ？」

いつも不機嫌そうで無愛想でなかなか笑わなくて、言葉も厳しくて、でもそんな君に、

「死ぬほど会いたい。」

一つの恋が終わりを告げました。綺麗な綺麗な初恋が。

そして今から困難を切り抜けた二人の、幸せに溢れた恋物語がはじまります。

多分。

## 6・君に逢いたくて（後書き）

ありがとうございました。

綺麗さっぱり別れるには蘭に新しい恋人が不可欠でした。

次回は今回の番外編みたいなものを書くつもりです。

良かったら読んでいただけたらと思います。

## 6・5 さよならの代わりに（前書き）

本編とはあまり関係ありません。蘭の部屋を出てから灰原に電話をかけるまでに起こった出来事です。



## 6・5 さよならの代わりに

三階で蘭と別れて俺は今、毛利探偵事務所の階段を下りている。すると二階の扉あたりに差し掛かった時、事務所から声が聞こえてきた。

「おい。世話になった家を出ていくのに挨拶はねーのか？」

おっちゃんだ。いつもは酔っ払って潰れるように寝ているのに今日に限って何故かお酒を飲んでいないようだ。

「おじさんまだ起きてたの？ごめんね。寝てると思ってたから。」

「いつもいつもすぐ酔って寝てるわけじゃねーよ。たまには考え事したくて1人になってる時もあるんだよ。」

小五郎は真剣な表情で新一にそう言った。しかし子供相手に話すような表情ではないなと新一は少し違和感を感じた。

「へえ、そうなんだ。でっこんな夜遅くに何考えてたの？」

新一はちよつとだけ興味があつたので聞いてみた。

「……………本当に出ていくのか？」

おっちゃんは真剣な表情で俺に問いかけた。

何だ。心配してくれてたのか。まあこう見えて結構優しいし、人情に厚い部分もあるからな。

「うん。突然な話でごめんなさい。今までありがとうおじさん。すごく楽しかったよ。」

「いや。礼を言うのは俺のほうだよ。いつも助けてくれてありがとうよ。」

…意外すぎる言葉に新一は心底驚いていた。まさか小五郎の口からお礼の言葉が出てくるとは思わなかった。

「えっ？どつしたのおじさん？何かいつもと違うよっ。」

「うるせー。行くならさっさと行きやがれってんだ。」

おっちゃんは少し照れながら無愛想にそう言った。

まあ確かにお礼言われるとこっちも恥ずかしいしどうしたらいいかわからない。

「わかった。もう行くよ。じゃあおじさん、元気でね。飲み過ぎに気をつけるんだよ。」

「ああ。元気でな。」

おっちゃんがそう言つと俺は事務所の扉を開け、出ていこうとした。

「おい！」

「どじしたの？」

また呼ばれた事に少し驚いたがすぐに子供のように返事が出来た自分にも驚いた。

「またいつでも遊びにこい。どんな事情があるにせよ”江戸川コナン”の家はここだ。…だが次に現場で会うときはライバルだからな！探偵坊主！」

新一は目を見開き驚愕した。何故自分のことを探偵坊主と？それに”江戸川コナン”の家って言い方もまるで…。まさか……。

「…おっ、おじさん？それって、どいつ…」

「俺は名探偵毛利小五郎だからな！」

俺の言葉を遮り、そう言っておっちゃんはニヤッと笑った。今まで

見せたことのないような、子供相手に見せるような笑顔ではない。ライバルが現れた時のような不敵な笑みだった。

その顔を見て俺もフツと笑みがこぼれた。

今まで何回も思ったことあるけどやっぱおっちゃんは名探偵なのかもな。

もう隠すことはない。向こうも探偵として自分に真剣に向き合ってくれているのだから。

俺は高校生探偵工藤新一として名探偵毛利小五郎に宣戦布告をした。

「わかりました。では毛利探偵。次に会うときは血塗られた惨劇の舞台で。名探偵との推理対決、心より楽しみに待っております。」

新一はそう言って小五郎にお辞儀をして事務所を後にした。

「へっ。バカ野郎。いちいち気障なんだよ。相変わらず。」

小五郎はさっきまで新一がいた場所を見ながらそう呟いた。そして窓のほうに視線をやり、小さな体で少し大きなカバンを持ちながらとぼとぼ歩き、携帯電話に手をやったりする工藤新一をじっと見つめていた。

「じゃあな。小さな名探偵江戸川コナン。楽しかったぜ。」



## 6・5 さよならの代わりに（後書き）

ありがとうございました。

本編とはあまり関係ないのですが、毛利小五郎は個人的に好きなキャラクターなのでどうしても書きたくなりました。

自分でも好きな作品になれそうなので良かったら感想お願いします。

## 7・いとしい人よ（前書き）

微妙に長くなりました。

話も中盤に差し掛かりましたし、頑張ります！

## 7. いとしい人よ

『死ぬほど会いたい。』

あなたがそんな事を言うものだから私は夜なのに体が熱くて眠れない。

まあ元々、こんな時間には寝てないし、よく眠れるタイプではないから良いんだけど。

あの言葉のあとのやり取りは少し経った今でも鮮明に覚えている。ていつか忘れられないものだった。

「はあ？何を言ってるの？」

「おめえに会いたくてたまらねんだ。」

何なのよ工藤君。私だって会いたいわよ。でもそんな言葉、素直じゃない私にはなかなか言えないのよ。

「あら。嬉しいわね。そんなことを言ってもらえるなんて。急にどうしたのかしら？」

ほら。また可愛くない言葉が出た。何で私はこうなのかしら。

「灰原。今から行っていいか？話したいこともあるんだ。」

嬉しい。工藤君が会いにきてくれる。もうすぐ工藤君に会える。

「別にかまわないけど。こんな夜中に女の子に会いに来るなんて悪い人ね。」

そう言ったら工藤君は「バーカ、じゃあすぐ行くから待ってる」と言って電話を切った。

もうすぐ工藤君が来る。私が初めて好きになった人が私に会いに来

てくれる。

こんなに嬉しいこととは思わなかった。

さっきの電話のやりとりとそんなことを考えながらコーヒーでも淹れて待ってようと思いリビングの方へ向かった。博士はもうぐっすり眠っている様だった。最近、博士も仕事のほづがすごく忙しそう  
で学会とかに顔を出している。

何を作っているのか全くわからないが。

そういえば明日からもどこかの大学に泊まりがけで行くと言っていた。

「明日からちよつとの間一人ね。」

一人は慣れているはずなのにこれも平和ボケなのか、少し寂しく感じてしまった。

明日は晩ご飯少なめでいいのね。とか考えていると、携帯電話が震えた。

いとしい人の到着だ。

「灰原、着いたぜ。開けてくれ。」

そう言われただけで私の胸はドキッとしてしまい、顔もなんだか熱くてしかたない。

こんなのは私には似合わない。いつでも無表情でしょ。そう自分に言い聞かせながら阿笠邸の扉を開けた。

すると走ってきたのか、よほど急いできたのか、肩で息をして少し汗をかいているいとしい人の姿があった。

「そんなに急いで来なくても私は逃げないわよ。まだコーヒーも淹れてないわよ。」

冗談混じり新一にそう言いながら中に招き入れた。

自分も新一より先にリビングに向かおうと思い、扉から振り返った瞬間、いきなり後ろから温かいものが被さってきた。ただその正

体は聞かなくても見なくともわかっている。

私がこんな事をされて幸せだと思ってしまう相手はあなた1人しかないもの。それをわかってこんな事してるの？

「あら。名探偵さんも夜になると狼さんになっちゃうのかしら？」

飛び跳ねる心臓を抑えつけるように動揺してなさそうな台詞をいう。

もう頭のとっぺんから足の指の先まで、甘くしびれて動くのも大変なの。。それにあなたの言葉。反則以外の何者でもない。

「会いたかった。灰原。1分でも1秒でも早く。」



最初は声が聞きたくなっただけなんだ。でも声を聞くと会いたくな  
っちまった。でもいざ会つと、こつして無理やりにも抱き締め  
くなっちまう。

なあ灰原。俺はこれからどうなっちまうんだ？」

(知らないわよそんなこと。あなたは言葉がいちいち甘いよ。)

バカ。もう勘弁してよ。何でそんな幸せな言葉を言ってくれるのよ。

「あら、随分正直な狼さんなのね。次会つた時は私、食べられちゃ  
いそうだよ。」

「灰原、それ冗談にならねーよ。」

それを聞いて新一はハハつと苦笑いをしながら灰原から手を離れた。さすがにそれは男としてどうなんだ、という考えで思い止まり、やつの思いで、灰原と一緒にリビングに向かった。

薄暗いリビングの中で灰原はコーヒを淹れてくれている。

博士が起きてくると悪いから、と電気もつけずに月明かりだけに照らされている灰原を見ると本当に俺はどーにかかってしまっただった。

「おいおい。これじゃ本当に狼じゃねーかよ。」

コナンは頭を抱えながら小さく独り言のように呟いた。

「あら。怖いこと言うわね。そんなに私を食べたいのかしら。小さな狼さん？」

いきなり灰原が目の前に現れた。コーヒーが出来上がったので持ってきたのだろう。

（うわあ聞かれちゃったぜ。あんなだけ聞かれたら俺は完全に変態じゃねーか！）

「バーロオ！何言ってたんだよ！ていうかコーヒー出来たんなら早く言えってんだ！」

（出来たからすぐ持ってきたんじゃない。変な人ね。）

何をそんなに焦っているのか灰原には理解が出来なかったのもう軽く聞き流して本題に入ろうとした。

「で？こんな夜中にわざわざ来てまで話したいことって何なのかしら？」

それを聞いて新一は自分が何しに来たのかをようやく思い出した。

「おっ、おっ。そうだった。アプねー忘れるところだったぜ！」

「忘れるってあなたらしくないわね。で、何なのよ？」

「蘭に全部話したんだ。組織のことも。俺が工藤新一だってことも。何で小さくなっちまったのかも。そしてお前のことも。」

「…そう。で？ついでに愛の告白でもしてきたの？」

灰原は内心、心臓が潰されそうぐらいのショックを受けていた。このタイミングで全部バラすということは自分と江戸川コナンとの

生活も終わってしまふ。

それに蘭さんからしたらこの話はある得ないぐらい辛い話だったと思う。ずっと好きで待ち続けていた人が実は小さくなって自分と一緒に生活していたなんて。

…でも、もしそれが私だったら怒り狂うけど、蘭さんだったらそれすらも受け入れてくれるのかしら。

……まあどっちにしろもう終わりね。

「いやー。それが蘭の奴、新しく恋人ができたみたいなんだよ！何かのろけ話とかされてすぐ話まとまっちゃった。んで家も出ちゃったから灰原、一緒に住もうぜ。」

は？

蘭さんに恋人？

あなたにのろけ話？

明日から一緒に住もう？

「あなた一体何を言ってるの？変な事を言わないで！本当なの！？」

「あー！俺もびっくりしたぜ！でもまあ結果オーライでよかったじやねえか！」

「…ちがう。結果オーライなんかじゃない。全部私のせい。私があんな薬を作ってあなたをこんな目に遭わせてしまったからあなたと蘭さんが離れることになっ…」

…灰原のやつまた後ろ向きなこと言ってやがる。

さっきの蘭の奴の幸せそうな顔見せてやりゃよかったぜ。

……………それにしても、可愛いいな。

そう思つて気がつくとき灰原はまだ何か暗い顔で話していたが、俺は灰原に近づき無理やりキスしてしまっていた。



「…んっ。ちよっ。」

灰原はいきなりキスされてびっくりしたのか、しばらくしてから我に返ったようで俺を引き離れた。

「あなた、バカじゃないの！？いきなり何をわけのわからないことしてるのよ！？」

灰原は顔を真っ赤にしながら俺に怒っていた。そんな顔も綺麗だなと思ってしまふ俺はかなり重症なんだろう。

「いや、何か暗い話になりそうだったし、おめえの顔見てたら何か…」

「暗い話って私はあなたと蘭さんの事を…！」

「『コナン君と過ごした日々も最高の思い出だよ。ありがとう。』  
ってあいつは言ってたよ。」

「…そんな!」

「なあ、灰原。みんな前に進んでんだよ。お前も前に進もうぜ。  
…出来れば俺と一緒に。」

「…そう。やっぱり蘭さんにはかなわないわね。あんな強くて優し  
くて綺麗な人なかないわよ。あなたいいの?本当に私で?」

灰原の問いかけに新一は優しく微笑んで、もう一度灰原を抱き締め  
た。

「バーカ。お前がいいんだよ。」

あなたは誰よりもいい人。私を救ってくれた人。

お前は誰よりもいい奴。俺に愛を教えてくださいました人。

夢のような日々が今、現実のものになろうとしています。  
温かく、優しい日々を二人で歩み続けましょう。

## 7. いとしい人よ（後書き）

ありがとうございました。

コナンが何か軽い感じになってますが、気になさらず。ちよっと書くことなくってきたので体を元に戻そうかなとか考えてます。

## 8・想う気持ちの美しさ(前書き)

また脱線気味です。

コナンと哀ちゃんの対決です。

## 8・想う気持ちの美しさ

…あの後は大変だった。

彼、本当に狼になっちゃうんじゃないかと思ったわ。

くあの日の夜く

「…ごめん、灰原。」

新一は一言そう言って灰原をきつく抱き締めながら、今度は先ほどとは違った、長く深いキスをした。

灰原はまたそれに驚いてしまい、体に力が入ってしまうような感覚を覚えたが、自分も好きな人、大切な人との初めてのキスなので新一を受け入れた。

……しかし。

「あなた、いつまでキスしてるつもりよ。あなた、いきなりどうしちゃったのよ?」



いくら何でもちよっとおかしいような気がする。自分の知ってる工藤君はこんなキャラじゃないし、もっと恥ずかしがり屋で奥手だったと思うんだけど。

「…すまねえ。俺にもよくわかんねえ。でもお前を見ると、何か色んなことが我慢できなくなっちゃまうんだ。お前を抱きたくて、触れたくて仕方なくなって正直たまんねえんだ。」

「あら。毒薬は飲ませたことはあるけど媚薬を飲ませた覚えはないわよ。」

工藤の返答にすぐさま冗談を言い返したが、灰原は胸をくすぐられるような妙な感覚に体がおかしくなりそうな気がした。

何て正直に物を言う人なのだろう。でも、悪い気はしなかった。こんなうす汚れた自分に女性としての魅力を感じてくれるんだから。こんなに嬉しくて幸せなことはなかった。

灰原はフツと息を吐き、コーヒーを口に入れた。

「お互い、小学生で良かったわね。」

「ん？どついう意味だ？」

コナンは灰原が呟いた言葉の意味がわからず、キョトンとした顔で灰原に問いかけた。

「バカね。今、体が元の姿、…大人になっちゃったら私達、性に溺れてしまつかもしれないって意味よ。」

灰原は冗談混じりに新一に言ったのだが、実際そうなる危険は十分にあると思った。

さすがに小学校低学年でその行為をすることはあまり良くないし、お互い相手の体の事を理解出来ているので大丈夫だろうと考えていた。

新一も灰原の言葉を聞いて『確かにその通りだな』と深くうなずいていたのだがふと灰原が新一を見ると何かを考えているようだった。

「あら。どうかしたの？」

「…でも灰原。俺、お前のそばにいながら10年待つ自信はねえよ。」

「……えっち。」

「お前のせいだよ。」

新一は顔を真っ赤にしながら灰原を少し睨みつけそう言い放った。

「何で私のせいなのよ？」

灰原は納得いかないというような顔でコナンに問いかけた。

どっぴり理屈をこねて私の責任にするつもりなのかしら？

「……おめえが可愛くて綺麗で、何か色っぽいから悪いんだよ。」

157

く今に至るく

あのあと、まだしばらくお互いの体をギリギリまで寄せ合い、深いキスをしていた。

（あなたがなかなかやめてくれないから私の話をしそびれちゃったじゃない。）

でも考えてみれば確かにそうだね。体が子供、頭脳は大人ってそういう性的に不便な一面があるわね。

「今まで、恋をしたことなかったから気がつかなかったわ。」

灰原は授業中一人で呟いた。

……呟いたつもりだったが、教室が静かだったのでその声は教室内の隅々にまで響き渡った。

教壇に立っている小林先生も顔を真っ赤にしてびっくりしている。

「あっ、哀ちゃん？」

小林先生に遠慮がちに呼ばれ、灰原はパツと目を覚ましたように周りを見渡すと皆が、少し赤い顔をして自分を見つめていた。

「すっすみません！」



下校中も灰原はいつもの少年探偵団に茶化されていた。

「おい灰原！誰に恋してんだー！？教えてよー！」

「そつよ哀ちゃん！誰なのー！？」

「はっ灰原さん！ほっ本当に恋をしっしているんですか？」

（ああ。もう最悪。）

「もう、これ以上私に何も聞かないで。あれは私の一生の汚点に残ることになりそうだから。わかった？」

灰原はいつも以上の不機嫌、無愛想オーラ全開で三人に言い放った。

灰原の鬼のような雰囲気、三人はそれ以上は何も聞けなくなり、それぞれ自宅への帰路についた。

「で？何だったんだあれ。」

学校から帰宅した、新一と灰原は阿笠邸のリビングで先ほどの話の続きを始めようとしていた。

恥ずかしそうにしている灰原に新一はここぞとばかりニヤニヤしながら灰原を責め立てた。

「なあー。教えるよ灰原。何考えてたんだよ？何か考えていたからあんな言葉が出たんだろ？」

「いい加減しつこいわね。私は早くあの事を忘れたいの！もう、思  
い出すだけで恥ずかしくて死にたくなるわ。」

新一は顔を真っ赤にしながら反論する灰原が愛しくて仕方がなかつ  
た。

たまらなくなった新一はソファーに浅く腰かけている灰原の後ろに  
回り込み、後ろから灰原を抱き締めた。

「何よ？」

「灰原、じゃあ質問を変えるぞ？」

灰原は至近距離になった新一の、耳に直接語りかけてくるような感覚に一瞬クラツときてしまったが、何か変な質問をしてくるという予感があったので気を取り直した。

「べつせろくな質問じゃないんでしょ？」

「誰が誰に恋してるんだ？言ってみろよ。」

この男はずるい。そんなのわかりきってるのにわざわざそんな事を聞いてくる。見てみなさいあの優越感たつぷりのあの探偵オタクを。もう完全に勝ったみたいなお顔してる。

でも……今日ぐらい負けてあげようかしらと少し思ったけど、残念ながら私にも昨日出来たのとおきがあるの。残念

「そんな事を楽しそうに聞いてくるならもうあなたに渡す必要はな

いかもね。」

灰原は悪魔のような笑顔で新一にニヤッと微笑んだ。

「なっ何をだよ？」

新一は思った。この笑みをしたときの灰原には絶対に勝てない。

新一は今までの経験上でそう悟ったが、『渡す』という言葉が妙に気になった。

「わっ渡すって何をだよ？」

「解毒剤よ。もちろん試作品だけどね。」

「何っ！？お前やっぱり研究続けてたのかよ！」

新一は今までとは違い、打って変わって真面目な顔をして灰原に問いかけた。



（ふふっ。真面目な顔しちゃって。見てなさい。また腑抜けた顔にしてあげるわ。）

「バカね。言ったでしょ？試作品だって。そんなに無理して研究してるわけじゃないわ。効果は今まで通り24時間。まああなたの場合には多少免疫があるから時間は少し短くなるかもしれないけど。」

そう言っただけで灰原はポケットに忍ばせていたカプセルを手に取り新一に見せた。

試作品という言葉聞いて新一は少しだけ安心した。ただ今さら試作品を飲んだところで何をしたいというわけでもない。新一は不思議に思った。

工藤新一として蘭に会いに行く理由ももうない。

「いや灰原。今さら24時間元に戻ったとしても俺は特にやる事ねえぞ。それに体が大きくなってお前のそばにいたら周りから変な奴に思われるかもしれないし。」

灰原はそれを聞いてニヤつと笑った。

「私も元に戻るって言ったら？」

「なっ！？お前も飲むのか？」

今まで頑なに飲もうとしなかった解毒剤を今回飲むと言った灰原に新一は驚いていた。  
それに灰原が元の体に戻って何をしたいかよくわからない。

「お前も飲むのはいいけど、1日だけ二人で元の体に戻って何すんだよ？」

( にぶい男ね相変わらず。 )

灰原は一瞬イラツときたが、またニヤつと悪魔のような笑みに戻った。

そして灰原は後ろから抱き締めている新一のほうに向きを変え、お互い向かい合うような体勢になり、さらに灰原は新一の肩に手を回した。

「工藤君、お互い元に戻ったら18歳と19歳よ。」

( うわ可愛いなおい。何か色っぽいし！ )

新一は至近距離にいる灰原にドキドキしながらそんな事を考えていた。

「まあ、そうだな。小さくなってから1年だし。」

当たり前だろ。とでも言いたいのか新一は普通にそう答えた。

「まだわからない?」

灰原はまた少しイラッとしたが、ゴールはもうすぐそこなのでグッと我慢した。

「何がだよ？」

「……………キス以上の事してみたくない？」

「えっ!？」

新一は予想もしない一言に心底びっくりして目を見開いている。

（ふふっ。みっともない顔になってるわよ探偵さん。）

「どっつ？まあ24時間っていう期限つきだけど。……男と女が愛し合って最後まで至るのには十分な時間だと私は思うわ。」

「おおお前！マジで言ってるのか！？いやっ俺は何ていうか、その、」

「あら。昨日言ってなかったかしら？10年も待てないって。」

（勝ったわ。もう完全に。ふふっ。困ってる困ってる。やっぱりあなたは純真ね。まあそんな所も好きなんだけど。）

「悩んでいるわね。私ってそんなに魅力を感じない女なのかしら？」



灰原は更に追い討ちをかけた。性的アピールからの情に訴える連続攻撃。

（ふふ。これで抱くと言わない男はいないでしょ。見てなさい。いやらしい顔をしながら『元に戻る』って言った瞬間、頭はたいてやるから。）

「灰原。」

「何？私を抱いてくれる？」

「わりい。それは出来ねえ。」

「えっ!？」

「でも薬は飲んでえんだ。」

んっ？どっいうこと？かなり予想外の答えが返ってきたわね。何を  
考えているのかしら？

「どっいうことよそれ？私を抱きたくないけど元の体に戻りたいっ  
てことよねっ。」

「抱きたくねえわけじゃねえよ！まっまあ結論はそっいうことにな  
っちゃうけどよ。」

「説明してくれる？」

「いやっもちろんお前を抱きてえよ！でも元の体に戻ったらそれより先にやりたい事がいっぱいあんだよ！

二人で洒落たレストランに行ったり、ちょっと遠くまで足伸ばして綺麗な景色を見に行ったり、旅行とかしたりさ。そういう子供のままじゃなかなか難しいことも元に戻ったら二人きりで出来るじゃねえか。俺にはお前を連れていきたい、いや。お前と二人で一緒に行きたい所が山ほどあんだよ。だからせっかく戻れるならお前を喜ばせたいんだよ。」

この人は。何でここまで私の想像を軽く飛び越えてくれるんだろう。すべてにおいて私の事を考えてくれている。

もうありがとつすら言つのもおこがましく思えてきた。

「おっおい灰原！どうしたんだよ！？」

気がつくと涙がこぼれ落ちていた。嬉しすぎて。

あなたの言葉が温かすぎて。

あなたの事が愛しすぎて。

でも私はあなたほど素直じゃない…

「わかったわ。どんな所に連れていってくれるか楽しみにしてるわ。  
プレイボーイさん。」

「だからお前それ引っ張りすぎ!」

素直じゃないけど…

私はあなたに最高の感謝と愛を込めてキスをした。



## 8・想う気持ちの美しさ(後書き)

ありがとうございました。

今回は二人の体を元に戻そうと思っています。



## 9 ・あなたに会えて（前書き）

短めですが更新しました。

## 9・あなたに会えて

今日は工藤君とデートの日だ。

そう、お互い工藤新一と宮野志保に1日限定で元に戻って遊びにくくという約束をした日である。

新一はさつきまで灰原と阿笠邸にいたが、自分の家に戻っていった。工藤新一になるために。

そして灰原もついさつき薬を飲んで宮野志保に戻った。

(しかし、元に戻るときのあの苦痛は何かならないのかしら？工藤君も毎回よくやってたわね。今後の課題の一つだわ。)

灰原はそんな事を考えながら洗面所の鏡を不機嫌そうにまじまじと見ていた。

久しぶりに見る自分の本当の姿。大して綺麗でもなく、相変わらず無愛想。自分でも嫌になっってくるぐらい目つきも悪いし、笑顔も下手くそ。全く工藤君は私のどこがいいのかさっぱり理解できない。よく考えると工藤君に私の、宮野志保の姿をちゃんと見せるのは初めてのことだ。

最初は特に何も思わなかったが、そう考えると少し緊張してきた。

洋服は春っぽい色のミニのワンピースの上からショート丈のデニムジャケット。  
明るくかわいい色合いで決して性格の暗い私に似合っているとは思わないが、以前いざって時にと言って博士がプレゼントしてくれた服だ。

「こんな女の子らしい服なんて…。」

そう言いながら少し赤い顔をして鏡を何度もチェックする灰原はどこからどう見ても恋する女の子であった。

「おい灰原ー？入るぞー!？」

（きた。予定より少し早かったわね。）

バクバクと心臓が高まってきた。いつも通りに話せるか心配だわ。

好きな人に初めて見せる自分の本当の姿に少し不安を感じながら、灰原はリビングに出ていった。

新一はリビングの椅子に座りながら何やらソワソワしている様子で、灰原がリビングに来たことにはまだ気付いていなかった。

「早かったわね。工藤君。」

内心ドキドキしながら灰原は新一に話しかけた。

するとやっと気がついたのか新一はこっちに振り向き灰原を見た。

「灰原：いや、宮野：だよな？」

新一は口をポカンと開けながらじっと私を凝視していた。

「ええ。はじめまして。宮野志保です。」

少し笑いながら灰原はそう言って軽くお辞儀をした。

「何よ？そんなに変？服装の事については言わないでね。博士からのプレゼントで自分でも似合わないってわかってるから。」

何を言っても返事をしない新一に痺れを切らした灰原は新一に問いかけてみた。

（何でしゃべらないのよ。何か気まずいじゃない。）

「……………ごめん宮野。」

やっと言葉を発したと思えばいきなりの謝罪だった。

「何で謝るのよ？あなたもしかして私の外見が気にいらなから  
緒に外に出るの……」

ガバツ！

まだ話をしている途中だったが、いきなり抱き締められた。大人に戻ったせいか、いつもより強い力で。

「俺、嘘言ったかもしんねー。」

「嘘？何のよ？」

灰原は抱き締められた事に心地よさと戸惑いを感じながら新一の話を聞いていた。何が言いたいのか真意はまだわからなかったが。

「だって。俺、今すぐお前抱きてえもん。」

「なっ！何を言ってるのよ！？あなたバカじゃないの！？」

灰原はあまりに予想外な答えに動揺してしまった。

「わりい。けどお前可愛いすぎるよ。服もすっげえ似合ってる。こんなに綺麗な女になるって予想してなかったから。」



嬉しいこと言ってくれるじゃない。

「あら。言い訳？あの時カッコつけて私の誘いを断ったんだから今さらなんじゃない？」

少し赤い顔で照れながら私を可愛いと言ってくれる彼があまりに愛しくて私は少しだけ意地悪を言った。

「わぁーってるよ。けどあとちょっとだけこのままでもいいさせてくれ。」

「わかったわ。狼さん。」

結局それから10分近く抱き合っていたのだが、彼がなかなか離してくれなさそうだったので私の「そろそろいいんじゃない?」の一言で熱い抱擁劇は幕を閉じた。

この日を迎えるまでに二人は色んなことがありました。

まさか本来の姿に戻って大手を振って歩ける日がくるとは灰原には想像すら出来なかったと思います。

楽しく限りのある時間。二人は本当に幸せな時間を今から過ごしていきます。

## 9 ・あなたに会えて（後書き）

ありがとうございます。

まさかまだ外に出かけられないとは。びっくりです。

次は正真正銘デートです。

10 心を込めて送る言葉（前書き）

大人編。なかなか終わりませんね。すみません。

## 10・心を込めて送る言葉

阿笠邸での熱い抱擁タイムのあと新一と宮野はようやく外出し、今は近くの大きな公園にきていた。

東京は言わずもがなだが、日本の首都で一般的に都会と言われている、自ずと自然が少ないというイメージがあるが、至る所に敷地面積の広大な公園があるため、都内でも意外と自然と触れあうことができるのである。

「あら。意外と近場ですますのね。」

宮野はちよつと嫌みっぽく新一にそう言った。

本当は二人きりならどこに行っても嬉しいのだが。

「じゃあねえだろ？昨日の今日だったし、あんまり遠出してまた体

が小さくなつちまつたら大変じゃねえか。」

「まあそつね。でも24時間前後なら大丈夫だと自信はあるんだけどね。」

それとも最近、欲求不満気味の名探偵さんは『どこでもいいから二人きりで夜を過ごさず』って感じなのかしら？」

「バーロオ。何言つてやがんだよ！お前みてーなおつかない女相手に、んなバカなこと考えてねーよ。…ただ夜だけは少し行きたい所があるんだよ。」

新一は灰原のからかいに顔を少し赤くしながら反論した。そして頭をかきながら「そこにはこの姿で確実にいきてーんだよ。」と照れながら付け足して言った。

「行きたいところ？どこなのかはわからないし少し興味あるけど今は聞いても教えてくれなそうだから聞かないでおくわ。」

灰原は内心どこに行くのか気にはなっていたが、先ほどの自分の冗談混じりの発言に新一は少し拗ね気味だったので追求はやめておくことにした。

「そういう事！さあ、行こーぜ。まだまだ時間はたっぷりある！」

「ええ。紳士的なエスコートをよろしくね。探偵さん？」

「へっ！任せとけ！」

こうして二人のデートは始まった。

一般的な10代と比べ物にならないような経験を多々しているが、それに反して二人の初デートはシンプルなものだった。

公園でベンチに並んで座りながらサッカーをして遊ぶ小さな子供を眺めたり。

近くの少しお洒落な喫茶店で昼食をとり、次の予定を二人で考えたり。

街に出て二人で流行の服やアクセサリを見ながら買い物したりと、

デートのメニューはごく普通の高校生カップルがいつもしているような定番コースばかりであった。

ただ、それでも二人は嬉しくて楽しくて仕方がなかった。

人の目を気にせず、好きな人と肩を並べながら、時には手をつなぎ



ながら自由に街を歩くなどということは少し前の、組織と命がけで戦っていた頃の二人からすると考えられないような事だった。

「ふー。よく歩いたな。日も暮れてきたし。少し休むか？」

「ええ。ちょっと久しぶりに街に出たからはりきりすぎちゃったわ。」

そう言って二人は駅の前にある小さなベンチに腰かけていた。

「いやあ。しかしおめえ本当にブランド物好きだな。俺にはその良さが全然よくわかんねーけどなあ。」

新一は宮野の肩にかかっている有名ブランドの紙袋を軽く睨みながら言った。

「あら。その割にはブランド名や歴史とか詳しかったじゃない。あつ。やっぱり平成のプレイボーイさんとしてはその辺の知識も必要なのかしら？」

「だからおめえそのプレイボーイってのいい加減やめろつての。それにブランド品の知識は母さんの影響だよ。」

いつも買い物と自慢話に付き合わされてたからな。嫌でも最低限の知識は頭に入るつての。」

新一は苦笑いしながら灰原に返事をした。

毎日一緒にいるのに話が絶えない。それが意味のある深い話であっても意味の全くないどうでもいい話だったとしても。こんなカップルを理想のカップルと世間ではいうのかもしれない。

「ふふ。工藤君といると飽きないわ。」

「おいおいそれほめてんのか宮野？」

（ほめるなんて物じゃないわ工藤君。あなたと話をしていると心地よくて仕方がないの。温かい光を浴びているような、甘い夢を見続けているような感覚になるのよ。）

灰原は心の中でそう言いながら新一のほづを見た。

「ありがとう。工藤君。」

気がつくと口に出ていた『ありがとう』の言葉。

私の心からの感謝の言葉。

「ああ？何がだよ？」

新一は何に対しての『ありがとう』かわからなかった。なので灰原に意

味を問いかけた。

「ふふ。何でもないわ。工藤君。」

そう言つて、優しく微笑みをくれる灰原の美しさに俺は言葉が出なかつた。

こんなに大好きな奴と一緒にいてくれるだけで俺は幸せだ。俺はそう思つ…。

新一はハッと気がつき、少し下を向いて笑みを浮かべた。

「工藤君？何笑つてるの？」

「いや。何でもないよ。」

そうか。おめえもこんな気持ちでいてくれてたんだな。

「灰原。」

「何？工藤君。」

「ありがとう。」

お互いが、お互いの側にいるという幸せをお互いが『ありがとう』という感謝の言葉で表現していた。

たった五文字の言の葉だが、二人の胸には熱く響いていた。

「さっ！そろそろ夜飯の時間だな！次行くぜ！」

新一はパツと立ち上がり、灰原の荷物を取り上げ、笑顔で言った。

「で？今から行く所が今朝言ってた行きたい所なのかしら？」

灰原は荷物をさりげなく持つてくれた新一に、ちょっと胸がくすぐられるような感覚を覚えながら問いかけた。

「ああ、まあな。一応レストランだから予約してるんだよ。」

新一はぎこちなく灰原にそう答えた。よく見ると新一は少し緊張しているようだった。灰原はそれを見て少し不思議に思っていた。

「ふーん。じゃあ、あなたもさっきからそわそわし出してる事だし行きましようか。」



「バカしてねーよ！  
じゃあちよつと距離あるし、電車は今ちよつと混雑してる時間帯だからタクシーでいくか。」

「あらそつ？まあ少し疲れてたから助かるわ。」

二人はそう言って、駅に常駐しているタクシーに乗り込んだ。

「お客さん。どこまでですか？」

「米花センタービルまでお願いします。」

## 10・心を込めて送る言葉（後書き）

ありがとうございました！

大人編はまさかの三回にわたっての連載になってしまいました！

そしてまさかまさかの次回が最終回になります！

と言ってもまだ連載は続きますが。

一応次を区切りにしようかと思っています。

11・君を愛しています(前書き)

一応、最終回です。まだまだ続きますが、キリが良いので一旦締め  
ます！

## 11・君を愛しています

米花センタービル展望レストラン。

新一は体が元に戻ったならここに宮野と来たいとずっと思っていた。

レストランに到着した新一は昔、蘭と二人でここに来たことを思い出していた。

まだ蘭が大好きだった頃、父親の真似をしてここで告白しようとしていたのだが、殺人事件に遭遇し、事件解決直後に体が小さくなってしまう結局何も言えなかった。あの時は悔しかったが、今ではいい思い出の1ページである。

（はは。父さんの真似して好きな女の子をまたここに連れてくるって俺も成長しねーな。）

新一は対面に座って外の景色を見ている宮野を見つめながらそんなことを考えていた。

「あなた、ここ随分と高そうだけど大丈夫なの？」

宮野は予想以上に高級感のあるレストランに少し驚いていた。

「ああ。心配すんなくて。父さんのカード持って来たから。」

「あらあら。道楽息子ね。」

宮野はカードをちらつかせてニヤニヤしている新一に呆れながら呟いた。

（はは。蘭と同じこと言ってる。）

「まあいいじゃねーか。それより食おうぜ。ここは飯も美味いんだぜ。」

「あら。前に誰とこんな素敵なレストランに来たことあるのかしら？」

「ギクッ!!」

新一はまさか「蘭に告白しようとして一度来たことがあります。」「なんて口が裂けても言えなかつた。」「そんなことを言ってしまうばムードぶち壊しである。」

「ばか、家族で昔来たんだよ!いいから食えよ!」

「ふっ。まあいいけど。じゃあいただくわ。」

そう言って宮野は料理に箸を進めた。

「おっ、美味しいわね。」

宮野は予想以上の味のレベルの高さに驚いた。と同時に『工藤君はこんなレベルの料理に食べ慣れているのかしら。』とこれからの事を想像して若干不安を覚えたが。

しかし、宮野はすぐに現実に戻る。

（ふっ。これからの事って私は未来に何を期待してるのかしら？）



宮野は料理を食べながら色々と考えていた。

最近になってだいぶ一般的な女の子のような夢見がちな一面も出てくるようになったが、まだまだ自分の過去のせいで未来に対して前向きな考え方は出来ないようであった。

「おい宮野。お前また何か暗い事考えてねえか？眉間にシワが寄ってるぞ？」

新一はふと宮野を見ると何か怖い顔をしていたので話しかけた。こ  
ういう顔をしている時の宮野はたいてい後ろ向きな事を考えている  
時だと新一は気づいていた。

「そうね。今日ぐらいは余計なことを考えるのはやめておくわ。料理も美味しいし、夜景も綺麗だし。こんな所でくだらない事を考えるのももったいないわね。」

宮野はニコッと新一に笑いかけてそう答えた。

(だめだ。これも最近気づいたが俺は灰原のこの笑顔に弱い。)

「だろ？余計なこと考えてるとシワが増えるぞ！」

新一は顔が少し赤くなっているのを隠すつもり冗談で言ったのだが、灰原から鬼のような目で睨まれたので軽口叩いてしまったことに心底後悔した。

しかし、それからはお互い笑顔が戻り、話に花が咲いていた。

新一はやはりホームズの事、事件の経験談などを熱く語り、宮野はそれを優しい目をしながらずっと聞き入っていた。

しかし、過去の事件談から科学や薬学の話題になると宮野の知識は新一を遥かに凌いでおり、新一は改めて宮野の頭脳に驚くという一面もあった。

二人の話はつきることなく、時間はあっという間に過ぎていった。

何時間が経過し、料理も食べ終わり、お互い食後のコーヒーを飲んでいた頃、宮野が急に真面目な顔になり新一に話をし始めた。

「ねえ工藤君。」

少しだけ…、

「ん？何だよ宮野。」

素直になつて…

「今日は本当にありがとう。すごく楽しめたわ。」

…自分の気持ちを伝えるわ。

「何言つてんだよ急に。俺もすげえ楽しかったぜ。」

…あなたに対する気持ちを。

「あなたにはどれだけ感謝してもしきれないぐらい、ありがとうって言葉すら言つのもおこがましく感じてしまつぐらいに感謝してるのよ。」

「何だよ。どうしたんだよいきなり。そんなに感謝してもらつづよくな事してねえよ。」

「こんなことを言うとあなたはまた怒るでしょうけど私は自分の開発した薬であなたの運命を変えてしまった。高校生探偵として世間から注目され、輝かしいスポットライトを浴びていたあなたの人生をねじ曲げてしまったのよ。これはあなたがどう私を庇ったとしても変えようのない事実よ。」

「…宮野。」

「それだけじゃないわ。本来結ばれるべき運命にあったあなたと蘭さんの仲を私が引き裂いてしまった。私はあなたの人生から大切なものをたくさん奪ってしまった。」

「いや宮野！それはちが…」

「それなのにあなたは、本来憎むべき存在である私に対して、組織から守ると言ってくれた。そして本当に組織の手から私を救ってくれた。」

「…宮野。」

「それだけじゃない。組織が崩壊した後もあなたは私の側にいてくれる。私にたくさんの笑顔をくれる。私に生きる喜びをくれる。…私はあなたには一生かけても償えない罪がある。私はあなたに一生かけても返せない恩がある。…もうあなたにどんな言葉を紡げばいいかわからないの。」

宮野は今、自分が考えていること全てを新一に伝えた。ゆっくりと、丁寧に。

新一はそれを静かに聞いていた。目を反らさずに、真剣に。

そしてようやく口を開いた。

「…宮野。お前とは色々あったよな。」

…ありがとう。お前の気持ちを聞かせてくれて。

「初めはびっくりしたぜ。お前が組織の人間だったって知った時は殺されるんじゃないかと思っただ。」

…俺もお前に伝えるよ。

「最初は確かにお前のことを憎んだよ。だって俺の体を小さくした薬を作った奴が現れたんだぜ。」

…じゃないとお前、勘違いしたまんまだしな！

「確かに体が小さくなって俺の人生は変わったな。でも宮野、お前は間違ってるよ。」

「…えっ？」



「俺が蘭と結ばれなかったのはお前のせいじゃないし、ましてやお前が俺の運命を変えたわけでもない。」

「…工藤君。」

「むしろ体が小さくなったことで俺の運命が変わったって言うのなら俺はお前と神様に感謝しなきゃいけない。」

「っ…どうしてよ!？」

「だってお前と会えたじゃねえか。」

「……………」

「人生の全ての出来事を運命と言ってしまつのなら俺はお前と出会えた運命に感謝してもしきれねえよ。」

「…工藤君。」

「なあ宮野。こうは考えてくれねえか？蘭と別れたことも体が小さくなくなったことも、組織に巻き込まれたことも、全部俺とお前が結ばれる運命だったからって。」

あなたって人は。

「ふふ。前から思ってたけどあなたって超ポジティブ思考ね。」

「はは。確かにそうかもしれないな。」

宮野は込み上げる涙と喜びからくる笑顔が抑えられずに涙を流しながら笑った。

「綺麗だな。宮野。」

新一は心からそう思った。

「バカ。こんな場所で何言ってるんだよ。」

「…宮野。渡したいものがあるんだ。」

「渡したい物？」

新一はそう言ってポケットから小さな箱を取り出した。

「あなた、これって…。」

新一は箱の上部を指で軽くはじき、箱を開けた。

派手というわけでもなく、地味というわけでもない。おそらくそんなに高級な品ではないのだろう。

でも、綺麗で美しくて上品な指輪だった。

「おめえの大好きなブランドのやつには敵わねえけどよ。多分お前に似合うと思うんだ。」

少し照れながら、それでも目を見つめながら、「着けていいか？」

と新一は宮野に問いかけた。

宮野は溢れてくる涙を右手で軽く抑えながら新一に左手を差し出した。

「悪いな。元に戻っても一応高校生なんでな。あまり高いのは買えなかったけど。でもやっぱりよく似合ってるぜ。」

宮野は指にはめられた指輪と新一を見て、一生懸命首を横に振った。

「ありがとう。どんな高級なものより輝いて見えるわ。嬉しすぎておかしくなりそう。でもこんな物まで用意して。あなた私をどうしたいの？」

あまりの喜びと驚きでうまく言葉が出なかった。でも出てくる言葉は少し生意気な言葉で。

自分の可愛げのなさに少し嫌気がさした。

「宮、……志保。俺はお前が好きなんだ。怒ると怖え所も少し目つきが悪い所も敵しい所も少し無愛想なところも。でも本当はすごく優しくて思いやりがあつて、ちよつと弱い所もあるけど皆のために無理して頑張る所とかも全部好きなんだ。」

「…あなた何を言つ、」

「志保、ずっと俺のそばにいてくれねえか？お前が好きなんだよ。世界中の誰よりも。俺、たぶんお前がいなくなったら生きていけねえ所ぐらいまで多分来ちまつてんだ。」



「…工藤君。」

言葉の一つ一つから溢れ出してくる愛情に私は涙を流すことしか出来なかった。

あなたの言葉が嬉しくて。

あなたの視線が優しくして。

あなたの愛が大きすぎて。

私はただ、うなづくことしか出来なかった。

そんな私にあなたはこんな最高の言葉をかけてくれた。

「宮野志保さん。君を愛しています。」

11・君を愛しています（後書き）

駄文、誤字脱字だらけのこの作品、読んでいただいております。ありがとうございました。

アクセスが増えるたびに、喜びと不安を抱きながら書いていました。

まだまだ連載は続くのでこれからもよろしく願います。

エピソード 幸せを掴んだ瞬間（前書き）

エピソード、おまけみたいな感じですよ。

## エピソード 幸せを掴んだ瞬間

誰よりも辛い思いをした二人がさまざま問題を乗り越えて今、結ばれました。

男は照れながらもまっすぐな愛をただひたすら女に伝えました。

女は自分の罪の意識からなかなか前に一歩踏み出せずにいましたが、男が照らす光に助けられようやく歩き出すことができました。

二人が歩み始める道は今までよりももっと険しいかもしれませんが、何といても男と女ですから。

それでも二人はお互いを想いながら前に進んでいくのだと思います。

~~~~~

「だからあなたレストランに来る前あんなにそわそわしてたのね。」

「えっ!?!?…まあ緊張してたからな。」

「それにしてもいつも通り気障なセリフのオンパレードだったわね？さすがはプレイボーイさんね。」

「おめえ本当にそれ引つ張るな。じゃあ聞くが今、こんな綺麗な景色をプレイボーイと手をつなぎながら見てるお前はプレイガールか！？」

「何それ？子供みたいな事言っちゃって。それよりどうする？今日はもう帰るの？米花まで戻って来てるし。」

「あー何も考えてなかったなあ。今日はここに来ることで頭いっぱいだったからなあ。」

「何よそれ。まあいいけど。ところでこのビルって宿泊ルームもあるの？」

「ああ。下のフロアだったか上のフロアだったか、確かあったよ。詳しいぜ。」

「あらそそう。じゃあプレイボーイとプレイガールついでにホームチームでもしてごらん？」





エピローグ 幸せを掴んだ瞬間（後書き）

一応これで本編は終わりです。

本当にありがとうございました！

この作品を見てくださった全ての人に感謝です。

## 12・目覚めた時の傳さ(前書き)

一応最終回の続きです。

こんな感じでちよこちよこ連載は続けていこうと思ってます。

あとこれからは自分の好きなキャラクターをもっと出したいと思っています。

## 12・目覚めた時の傳々

…あの時間は夢のようだった。

お互い元の姿に戻って1日デートして最後にレストランで告白。

宮野は心から喜んでくれていたようだった。

しかも夜景を見ながら俺に言った言葉。

『エッチでもしていく?』

俺は死ぬほど興奮してしまった。

しかし、何とか気持ちを抑えて帰路についた。

「本当によかったの？プレイボーイさん？」

宮野はまだ俺をからかうような口調で横から色々言ってくる。

「バツ！バロオ！べつ別に今日じゃなくてもいいじゃねえか！何だったら10年待ってやるぜ！」

新一は内心ものすごく焦りながら答えた。

「無理しちゃって。」

そんなみつともない彼を見ても宮野は愛しさしか感じなかった。

（ひとつになりたいと思っているのはあなただけじゃないのよ？）

心の中でそっすつぶやきながら。

「じゃあね工藤君。今日は本当に楽しかったわ。」

二人は工藤邸、阿笠邸の前に到着したので宮野が先にお礼と挨拶を新一にいったのだが。

「じゃあねはいいけどおめえ博士はどっか出掛けてるのか？灯りついてねえじゃねえか。」

新一は不思議に思った。そういえば朝もいなかったような気がする。まあ朝は宮野の姿を見てそんなこと気にならなかったが。

「あら。朝言わなかったかしら？博士、今日からしばらくいないのよ。学会がどうとかで。」

宮野は当たり前のように答えた。別に何日か一人で過ごすことに何の苦痛も今さら感じない。むしろ気を遣わないですむ。

「宮野。」

「何かしら？」

宮野は新一がこれから言う事の予想はついていた。

それを言ってくれる事を待っていたと言ったほうが正しいのかもしれない。

「俺ん家来いよ。1人なんかさせられねえし。」



「あら。優しいのね？まあ家に行ってもその優しさが続くのかはわからないけど？」

「バーロオ。さみいしさつさと入れよ。」

そう言って二人は工藤邸に入って行った。大きな喜びと少しの緊張をお互い隠しながら。

「もう、すぐ寝るだろ？風呂はあっち。で、お前の寝室はここ使ってくれ。」

新一はしばらく宮野と談笑してから宮野に部屋を案内し始めた。

(しかしまあ、何回来てもまあ大きな家ね。まあ世界的な推理小説家と女優の家って聞けば納得はできるけど。)

宮野はそんな事をぼんやり考えていたので新一の部屋案内はあまり耳に入っていなかった。

「おい宮野！聞いてんのかよ！？」

「えっ？あつ。ごめんなさい。聞いてるわよちゃんと。あと寝室は結構よ。」

「あー？何でだよ？ソファーかなんかで寝んのかよ？」

「何バカな事言ってるのよ。何もわざわざ普段使わないような部屋で寝なくてもあなたと一緒にあなたの部屋で寝ればいいじゃない。」

宮野はさらっとそんなことを答えたが、新一はそれを聞いて目を見開いて驚いていた。

「いやっ。それはお前、いいのかよ？」

「別に問題ないんじゃない？あなたに理性があればの話だけど。」

宮野はニヤリと笑ながら新一を挑発するような口調で言った。

「わあつたよ。じゃあ俺はすぐに寝るからな。おめえもシワとかシミとか作るのイヤだったらあまり夜更かししねえことだな。」

「あら。言っじゃない。」

二人はそんなことを言いながら新一の寝室に入っていた。新一は本当にすぐ寝るつもりなのか上に着ているジャケットだけ脱いで床に投げ、すぐにベッドに寝転がった。

「あなたお風呂も入らずに寝るの？」

宮野は新一が投げ捨てたジャケットを拾いながら問いかけた。

「あー。明日の朝に入るよ。俺は疲れてんだよ。晩飯の時に一生分ぐらいの勇気と度胸を使っちゃったからな。」

新一は苦笑いをしながら答えた。人生初めての告白。指輪まで用意して。男性ならわかると思うが、どれだけ自信があってもこの時の緊張に勝るものはなかなかない。

それを聞いて宮野はまた胸がくすぐられるような感覚を覚えた。好きな男の子が自分のことを想って、自分のためにしてくれた事。自分のために言ってくれた言葉。

あのレストランでの告白は何年たっても自分の中で輝き続ける。宮野はそう確信している。新一が愛しくてたまらない。この想いも変わることはないだろう。

宮野は新一を見つめながらニコツと笑った。そしてベッドに横になっっている新一に腕をまわし、抱き枕のように抱きついた。

（まさか自分がこんなことをする性格だと思わなかったわ。）

「おおっおい！宮野！どうしたんだよ。いきなり！？」

可愛い可愛い可愛い…！

新一は抱き着きながら自分を笑顔で見つめてくる宮野を見てその頭の中で何度も叫んだ。しかし急に陥ったこの状況をどうすればいいかわからなかった。

「あなたさっき言ったわよね？10年待ってやるって。」

「何だよ。またその話かよ。ああ待つよ。何年たってもおめえが好きだしな。」

「あら。嬉しいじゃない。でもあなたの意見は残念ながら却下よ。」

新一は「はっ？」と心の中で呟いた。

却下って何だよおい。ていうか顔が近えよ！こいつとんどん近づいてきてるよな。

宮野は不思議そうにしている新一に軽いキスをし、新一の耳元で小さな声で呟いた。

「私が10年も待てるわけじゃない。あなただけじゃないのよ？色々我慢してるのは。」

「ええっ！？いや待て宮野！俺もまあお前に色々言ったが、こっぴ



「事はまずよく考えてだな！」

「するの？しないの？いやっ、違うわね。したいの？したくないの？」

宮野はなかなか踏ん切りのつかない新一に少し苛立ちを覚えた。

「…すみません。したいです。」

「じゃあ帰ってきて早々にベッドに寝転がる前にする事があると思わない？」

「……………すみません。シャワー浴びてきます。」

「ふふ。待ってるわ。」

宮野がそう言うと新一は変な汗を少しかきながら風呂場に向かった。

お互い何にも縛られず、最高の幸せを実感した二人。しかしその幸せの頂点を迎える瞬間に、予想もしていなかった、いや。予想はしていたのかもしれないがすっかり忘れていた出来事が起こった。

「はあ。何つつか幸せだな。幸せには違いないが、最初からあんな感じなんだな。俺、尻に敷かれんだろうーな。」

新一はシャワーを浴びながら苦笑いでそんなことを考えていた。しかし、確かな幸せを感じていた。

「あいつむちゃくちゃ綺麗だな。何か緊張してきたな。今からあいつと、俺……。」

今から自分と宮野がひとつになる。そう考えると少し緊張してきた。

「何か緊張してきたな。体が変に熱くなってきやがった。ん？……  
ぐっ！」

宮野はベッドに横になりながら新一が帰ってくるのを待っていた。  
先ほど新一からプレゼントされた指輪を眺めながら。

「幸せってこういう事なのかしら。それにしても工藤君が帰ってきて  
私もシャワーを浴びた後、私、工藤君とするのね。」

そう考えると少し緊張はしてきたが、それ以上に楽しみだった。好きな人に抱かれるということが。

(早く帰ってこないかしら。)と宮野は天井を見上げながら考えているとドアがガチャッと開いた。新一が出ていていただいたい30分ぐらい経過したころだった。

「遅かったじゃない工藤く……。えっ！？あなた！！」

「ははー。思っていたより早かったな。何かすみません。」

宮野はベッドから起き上がり新一を見た瞬間、驚愕した。新一の姿がまたよく見慣れていた江戸川コナンの姿になっていたからである。

しばらくお互い見つめあっていたが、少ししてお互いがプッと吹き出し、笑い合った。

「何それ？はあー。緊張して損したじゃない。」

「うるせー！俺だってむちゃくちゃ緊張したっつこのー！」

「でもちよつと短いわね。やっぱり免疫がついてるせいなんですよ。けど。だいたい、9時すぎにあなたが薬を飲んだとして、今が12時すぎだから約15時間ね。ちよつとこうなってくると試作品をあなたに飲ますこと自体考えなくちゃいけないわ。」

「いやあ。まあ仕方ねえよ。こりゃ本当に10年待つしかねえんじゃないか？はは。」

新一は宮野が真剣な表情で自分の薬の持続時間について悩んでいたので冗談混じりでそう言った。

「仕方ないってあなた。まあいいわ。次はあなたに完成品を飲ませてあげるわ!」

「いやっだから言ってるじゃねえか。研究は無理すんなって。ゆっくりやれよ。俺は大丈夫だから。」

「何をバカな事言ってるのよ!あなた私をいき遅れにするつもり? そんなの私が我慢できないわ!」



(いき遅れって俺らの年でそれ言うか。)

新一は本気表情でそう言っている宮野を見て、苦笑いするしかなかった。

「はあ。何だかどっと疲れたわ。もう寝ましょつか?」

「そーだな。もう夜おせーし。」

「あら。こんな時間まで起きてて悪い子ね。お姉さんと一緒にねんねましようか？ぼじや。」

「うっせえバーロオ！」

## 12・目覚めた時の傳さ(後書き)

ありがとうございました。

宮野も新一も何だかキャラが崩れてきましたね。

今回は最高にキザな奴をちょっと出そうかなと思っています。

白き幻影、月光を浴びて（前書き）

自分の大好きなキャラクター、怪盗キッドの登場です。

続きではないので題名に番号は入れておりません。

白き幻影、月光を浴びて

毛利探偵事務所を出てからしばらくしたある日の夜、俺は自分の家（工藤邸）で一人のんびり過ごしていた。

「あー。暇だなあ。灰原んところに顔出そうかなあ。でももう時間遅えしなあ。」

昼間は学校や探偵団たちと遊んでいるので問題はないが夜は特にする事がなく、暇をもて余すことが多かった。

バサッ！！

「ん？何の音だ？何かベランダ辺りから変な音がしたな。」

聞き慣れない音がベランダから聞こえてきたので新一は急いで見に行った。すると予想もできないくらい意外な人間がベランダに立っていたのである。

闇夜を照らす月の光を浴びながら、白き衣に身をつつみ、世界を股にかけて美しく輝く宝を鮮やかな手口で盗み出すあのキザな怪盗が。

「ん？まだ起きてるんですね。いけない子供だ。突然すみません、翼を休めるためにしばらくここで…って。」

「あーっ！…！」

二人の声は夜の静寂さをもろともせず響き渡った。

「おめえは名探偵！…何でここにいるんだよ！？」

怪盗キッドはたまたま止まった家に宿敵がいたことに心底驚いている様子だった。

「何でもクソもここは俺ん家だよ！てめえこそ何してんだよ！そんな服着てるって事はてめえまた何か盗んだのか！？」

新一も突然現れたライバルに驚きを隠せなかったが相手はいつもギリギリの所で逃げられている怪盗キッドだったので敵意むき出しで答えた。

「相変わらずやかましい奴だな。まあまあそんなにカツカするなよ。それに今日は盗みじゃねえから安心しな。それより丁度よかった名探偵。おめえもう飯食ったのか？」



「はあ？さっき食ったけど。何でんな事聞くんだよ？」

「いやもう追いかけてくる警察まいてたら腹減ってきてもう飛べねえんだよ！わりいけど何か食わせてくんねえか！？」

「はあー！？何で俺がお前に飯食わさなきゃいけないんだよ！警察いってくさい飯でも食ってこいよ。」

「おめえそんなかたい事言うなよー！大体今まで俺がどれだけお前に協力してやったと思ってるんだよ？この前だって飛行船からほり出された時、助けてやったじゃねえかよー！」

確かにいつもは憎い敵だが、困った時にはよく助けてもらっている。特に蘭をまだ待たせている時はよく新一に変装してピンチを切り抜けてもらっていた。

「ったく。しゃあねえなあ。て言ってもうちには人に食べさせよう  
な飯はねえから隣の家にいくぞ。」

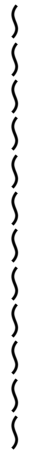
「隣？知り合いの家か？」

「おめえなら知ってんだろ？阿笠博士の家だよ。」

「…ははは。それはまた厄介な人の家だな。」

よく阿笠博士が作ったであろう発明品で危ない目に合ったことがあったのでキッドは少し苦笑いしてしまった。

（しかしまたとんでもねー所に下りちまったな。）



「博士ー？まだ起きてるかー？」

「お邪魔しまーす。」

「どーしたんじや新一？こんな夜中に…っってえっ！おぬしはまさか  
「！」

「どうも天才発明家阿笠博士。お顔を拝見させていただくのは初めてですが、こうして改めてお会い出来て光栄です。」

キッドは驚いている博士に対していつもの口調で挨拶をした。

「何かツッコけてんだバーカ。さっさと入れよ。」

「うるせー。お約束だよ。」

そう言って二人と阿笠博士は中へ入っていった。

「博士どうしたの？工藤君が来たようだったけど。  
あら。珍しいお客さんね。」

「あれ？この子あんま驚かぬーなあ。俺の事知ってるよなあ？確か  
会ったことあるし。」

キッドは自分を見て驚かない灰原を不思議に思い、新一に尋ねた。

「はは。まあ根性座ってるからじゃねーか。」

「あら工藤君。失礼ね。女性に向かってそれはないんじゃない？」



「いや冗談だよ。はは。あつ。灰原ちよつとわりいんだけど何か食べる物ねえかな？このコソ泥、腹へって行き倒れになってたんだよ。」

「あら。泥棒なんだからどこかから食べ物盗めばいいんじゃない？」

（はは。ひでえ言われ様だな。よし！こっちは！）

「いえ。美人で聡明なお嬢様。私が盗むのは光輝くダイヤモンドとあなたのような美しい女性の心だけですよ。」

そう言ってキッドは片ひざをつけて灰原の手をそつと握った。よくある紳士のポーズである。

「あら。嬉しいこと言ってくれるじゃない。でもよくそんな寒い台詞を恥ずかしげもなく言えるわね。」

灰原は照れることもなく、薄ら笑いを浮かべながらキッドにそう言い返した。

「うわー。きついな。この子供。何か怖えし。」

「まあ。食べ物なら今日の晩御飯の残りがあるからそれでも食べる  
？イヤならその辺の草でも食べてなさい。」

「…ありがとうございます。是非いただきます。」

キッドは灰原の手厳しい言葉と冷静な発言に苦笑いを浮かべるしかなかった。

「おいキッド。どーでもいいけど早くその手離せよ。」

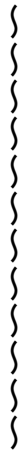
新一はそう言って灰原の手を握り続けているキッドの手をビシッと叩いて、二人を引き離れた。

(ん？名探偵のこの感じは。ははーん。それにこのお嬢さんのちょっと照れた顔。なるほどね。)

「いやいやわりいらわりいら！ちょっといつものクセだね。職業病って奴だよ！」

（あとで絶対からかってやる！）

キッドはそつ心に決めニヤリと笑った。



「うんめえなこの飯！お嬢さんが作ったのか！？」

「あら。ありがとう。あなたみたいなキザな怪盗のお口に合うか心配だったからよかったわ。」

「それよりおめえ、今日何してたんだよ？そのカッコしてるとして」とはやっぱり何か盗んだんじゃないかねえのかよ？」

新一は灰原の作ったご飯を美味しそうに食べるキッドに何か複雑な気分になりながら問いかけた。

「ふー。」「ちそうさん！いやあ美味かったぜ！」

「質問に答えるよコソ泥！何なら今すぐ警察呼んでやるーか！？」

「あーうるせーな。だからさっきも言っただろっ？今日はそんなじゃねえって！しっつけえ奴だなあ。」

キッドは面倒くさそうに新一に対してそう答えた。

「じゃあ何してたんだよ？」



確かに最近ニュースでキッドが予告状を出したっていう報道もなかった。キッドは犯行前に必ず予告状を出すので何もしていないというキッドの言葉は本当だと思った。

「今日は前に盗んだ宝石を返しに行っただけだよ。目当ての宝石ではなかったんでね。」

「あなた、よく目当てじゃないと言っただけ盗んだ物を返してるけど、一体何が目的なのよ？お金目当てじゃないってことよね？」

「そうだな。確かにおめえの目的はよくわからねえ。目立ちたいだけだったら別に宝石だけじゃなくてもいいしな。それに目当ての宝石って何なんだよ?」

二人から質問を受けたキッドだったが答えられる内容の質問ではなかった。ので何も答えなかった。

「それは言えねえな。こつちも色々と事情があるんでね。まあ一つだけ答えられるのは俺は金目当てじゃないってことぐらいかな。あと目立ちたがり屋ってのは否定はしねーな。」

「何で答えらんねえんだよ？ていつか目立ちたがりなのは本当なんだな。」

新一はまああれだけ無駄に派手な演出を毎回してるんだから目立ちたがりってというのは納得できた。

「俺からも質問があるんだが。」

（くく。待ってたぜこの瞬間を。）

「おめえらデキてんだろ？おちびちゃんのかせにいやらしい奴らだな。」

キッドはこの上なくニヤニヤと笑い、嫌みな言い方をした。

「バーロオ！いきなり何言ってるんだよ！んなわけねえだろうが！それに俺は高校生だぞ！」

新一は急に言われた言葉に激しく動揺し、顔を真っ赤にしながら答えた。

灰原は何も答えず静かにお茶をすすっていた。

「見てりゃわかるっつもの。それにお嬢さんもこの探偵さんと一緒に体だけちっちゃくなってんだろ？本当は同じ年か、1つか2つ上ぐらい。間違ってるかな？」

「あら。何を根拠に言ってるのかしら？どこから見ても小学生にしか見えないと思うけど。」

「いやいや普通の小学生には見えねえとは思っけど。」

新一は心の中で突っ込んだ。

「俺は天下の怪盗紳士だけ。あなたの胸元に光る指輪を見ればわかりますよ。今高校生の間で流行しているブランドの指輪でサイズは7号かな？子供の指には少し大きいからネックレスにしてるんじゃないですか？それにその指輪をえらく気に入ってる様ですし。」

キッドはニヤニヤ顔を戻すことなく灰原に自分の推理を披露した。

「ふふ。さすがは名探偵のライバルさんね。でもこれ以上、私と工藤君を茶化すと警察に電話するわよ?」

「おっと失礼。そうですね。ではお腹も満たされたことですしそろそろ帰らせていただこうかな。」

「おいちょっと待て！」

そう言ってキッドは迷惑なことに部屋の中で煙玉を投げ白煙と共に姿を消した。

「あの野郎言うだけ言って帰りやがったな。」

「そうね。まあいいんじゃない。あまり仲良くなるのもまずいでしょ。」



「まあな。それにしても俺がおめえにあげた指輪をえらく気に入ってるってあいつ言ってたけど何を見て言ったんだ？」

新一はそれが不思議だった。確かにいつも身につけてくれてはいるが特に気にいってる仕草は見せていないと新一は思っていた。

「はあ。それがわからないのならあなたにあの怪盗を捕まえるのは無理かもね？」

新一は気がついていなかった。灰原がいつも胸元の指輪をふとした時に見ては幸せそうな顔をしていることに。

白き幻影、月光を浴びて（後書き）

ありがとうございました。

怪盗キッドのカッコよさを出すのはなかなか難しいですね。

またお願い致します。

13 恋と愛の計りかた（前書き）

今回は西の名探偵の登場です。

いやいや馴染みある関西弁は書きやすいです！

### 13 恋と愛の計りかた

「ふー。最近暖かくなったわね。この湿気を受け入れる気には到底なれないけど。」

「じゃあねえだろ。日本は湿気が高えんだから。これから真夏にかけては一番ひでえだろーな。」

二人は阿笠邸にてたわいもない会話をしていた。  
今日は土曜日で特にやることもないが、だからといって外に出ても行きたい所はない。人間そういう果てしなくダラダラした思考を持

っ  
てしてしまうことは必ずあるだろう。  
まあ漫画やアニメだいたいがいこんな日でもしっかりとイベントは  
用意される。

ピンポーン！ピンポーン！ピンポーン！

「…おい灰原。出るよ。」

「いやよ。何で出ないといけないのよ。あなたが出なさいよ。」

「いやおめえの家だろうが。意味わかんねえよ。」

「動く気しないのよ。それに何だかすごく面倒なことになりそうな気がするのよ。」

「あー！？何だそりゃ？わあったよ俺が出りゃいい……」

「誰も出えへんから勝手にお邪魔しまっせーっと。おーっす工藤！  
久しぶりやないか！元気しottaか？」

やはり漫画やアニメにイベントはつきものであった。  
服部平次。東の工藤新一と並ぶ西の高校生探偵。

「はは。灰原。おめえやっぱ冴えてるな。」

「あら。ありがとう。あなたに褒めてもらえるなんてうれしいわ。」



灰原は別にそんなこと思わなかったが、嫌みっぽく言って面白がっていた。

「んで。わざわざ大阪からいきなり出て来て何の用なんだよ!？」

「いやー。やっぱりたまには工藤の顔見とかんと気が抜けてまっくんやー! やっぱ西の探偵としては常に東の探偵を意識してやっていかんとあかんと思うしなー!」

服部は楽しそうに話していたが全て嘘だと新一は見抜いた。ついでに隣に座って雑誌を読んでいた灰原にも嘘だとすぐにわかった。服部はあまりにも適当に答えていたし、第一、そんな下らない理由で

わざわざここまで来ない。

「んなどーでもいい事は言わなくていいから何の用なんだよ？何か話があつて来たんだろ？」

「いやー！やっぱバレてもうたか！まあお前につく嘘にしては苦しすぎたっちゆうことやな。」

「まあな。お前は嘘は下手くそだからな。」

「まあ、関西人は正直者が多いっちゅうこっちゃ。んでまあ本題やねんけど工藤お前、あの姉ちゃんと別れたらしいやないか。何やフラれよったんかいな？」

服部は嘘も下手だが、質問も下手くそだった。もちろん推理で犯人を追い込む時は完璧な順序で詰めていくのだが。しかし新一は服部のどストレートな質問に動揺した。そして隣の灰原も少し驚いていた。

「はは。いきなり何言っただよ服部。ていうか何でおめえが知っただよ！」

「何やホンマやったんかいな。いや、和葉の奴がお前んとこの姉ちやんに聞いたつちゆうてえらい騒いでてな、んで俺もちよつと気になつてお前んとこに確かめにきたわけや。」

服部は今までの経緯をざっくりと説明した。まあ恋愛事だけでまさかここまでくるとはいいつ暇なのか？と新一と灰原は思ったが、わざわざ来てくれるのでそれは口にはしなかった。

「はあー。まあな。蘭とは終わったよ。あいつも今は新しい彼氏と仲良くやっってるみてえだし。俺も組織との対決が終わったからもうあそこにいる意味はねえからこつちにいるしな。」

「ほおーう。んで、今はそっちのちっこい姉ちゃんとヨロシクやっ  
てるちゅつことやなあ?」

「なっ!お前何をバカなことやってんだよ!?大体ヨロシクって言  
い方がやらしいんだよバーロオ!」

新一はニヤニヤと笑いながら聞いてくる服部に激しく動揺しながら  
反論した。キッドの時もそうだが新一はこの手のからかいにはめっ

ぽろ弱かった。

「へえー。じゃあ付き合ってるいんか？」

「いやっそれはまあ、何つつか付き合ってるっちゃん付き合ってるけどよ。」

「ほら見てみい！俺の読みは正しかったのう！なあそっちのちっさい姉ちゃん。工藤は男としてどうや？」

「そうね。あなたと違って女の子を喜ばせる言葉や嬉しくさせてくれる言葉をよく知ってるわよ？ただ……」

いきなり服部から話を振られて少し驚いたが、別に変なことを聞か  
れてるわけではなかったたので普通に答えようと思ったが、それでは  
少し面白くないと思ったのか灰原は少し笑いながら「ただ……」と付  
け加えた。

「「ただ？」」

「女の子からベッド誘わせといていざ始まるって時に彼が縮んでちっちゃくなっちゃったのは少し残念だったわね。」

「……………」

一瞬の沈黙のあと、しばらく服部の大笑いの声が響き渡った。

「ははは……！うわーお前情けないやつちやなあ。俺そんなんしてもうたかも女の子んところによう会いにいかれんなあ。」



「バーロオ！ちっちゃくなつたのは俺の体だよ！おい灰原！おめえも紛らわしいこと言っくんじゃねえよ！」

「あら。私は別に紛らわしいことなんか言っていないわよ。あの時の事を普通に説明しただけだけど？それともあなた、何か身に覚えがあるのかしら？」

灰原はまた小悪魔のような顔で必死になって反論している新一にそう問いかけた。

「はははは！まあまあちっこい姉ちゃんももうそれぐらいにしたってや。それ以上いじめたったら工藤がかわいそうやがな。いやーおもしろかった！」

「てめえは笑いにきたのかよ？」

新一はひたすら大笑いしている服部を見てブスツと拗ねたような顔をしながらうっとおしそくに服部を見た。

「いやいやちゃうちゃう！いやーお前があ姉ちゃんにフラれたって聞いてへコンでんちゃうかと思って見に来たんやがな。でも今日ここに来てあんたら見た瞬間に幸せオーラ全開やったから安心したわ。しかしまあそのちっこい姉ちゃんのおかげでよおさん笑わせてもらっただけだな！」

新一は服部の話を聞いていやつなのかうざいやつなのかちょっと迷っていた。まあ基本的には心配して来てくれたんだからいいやつには違いないのだが。

「んじゃまあ俺は用が済んだからもう帰らしてもらっわ。」

そう言っつて服部は立ち上がって玄関のほうに向かおうとした。

「えっおい服部！もう帰んのか？」

「当たり前やがな。名探偵は忙しいもんなんやで工藤。ほなな工藤」  
「！」

「うるせーバー口オ。じゃあせいぜい頑張るんだな。」

そう言つて新一はソファ―に座つたまま別れを告げた。別に玄関までわざわざ送つてあげなければならぬような関係ではない。しかし隣に座つていた灰原はいつの間にか玄関のほうに向かつていた。

「おうちっこい姉ちゃん。お見送りしてくれるんかいな。あいつとはえらい違いやのう。」

「あなたがいじめるからよ。彼ちよつと拗ねちゃつたじゃない。」

「それをなだめんのが奥さんの仕事やでー。」

「ふふ。何よ奥さんて。…でも服部君、ありがとつ。わざわざ来てくれて。そしてごめんなさい。彼の友達のあなたには謝らなければいけないわ。」

「あーあー。いらんいらん。そんなしみつたれた言葉はいらんでー。」

それより俺が聞きたいのは一個だけや。」

服部は灰原の謝罪を無理やり制止した。謝られることなど服部には何も無い。ただ一つだけ気になっていることが服部にはあった。

「姉ちゃんあいつの事ホンマ好きなんか？好きなんやったらどれくらい好きやねん？ちよつとそれだけ答えてくれんか？」

灰原は服部の質問に少し驚き答えるのに躊躇したが、服部は優しく笑いながら問いかけてくれていたので灰原もすつと答えることがで

きた。

~~~~~

「何話してたんだよ灰原。また変なこと言い合ってたんじゃないの  
か？」

「あら。何のことかしら？もしかしてねっきのしやないの？」



灰原は玄関からリビングにいる新一の所に戻ったのだが新一は何やらまた拗ねているようだったので灰原は少し笑いながら新一に寄り添うように腰掛けた。

「おめえあの言い方は何かすげえ情けねえじゃねかよお。」

そう言って新一は寄り添ってきた灰原を抱き締めた。二人の幸せな時間である。

「ふふ。ごめんなさい。じゃあまたあんな機会が訪れたときのあなたには期待して大丈夫？」

「大丈夫だよ。確かに緊張はすると思うけどよ……」

「思ひげど…?」

「俺、お前見てると何か自分のこと抑えらんねえぐらい変な気分になっちまうんだよ。今はお互い体が小学生だから大丈夫だけどな。もし高校生に戻ってこんな感じでくっついていたら俺、お前のことが狂ったみたいを抱いちまうかもしんねえぞ。」

新一は顔を真っ赤にして灰原にそう話をした。高校生ならではの正直な気持ち。素直にとんでもない事を言う新一に灰原も顔を真っ赤にしてしまったが、すぐに笑顔になり新一に優しくキスをした。

「ふふ。じゃあなおさら早く解毒剤を完成させなきゃならないわね。」

「何だよ？ここで解毒剤は関係ねえよ。確かに元に戻ったらって言ったけど別に俺はこのまま体が成長するまで待つても…」

新一の話は灰原の二回目のキスによって止められた。唇を離す灰原は愛おしそうに新一を見つめた。

「言ったでしょ？私が我慢できないって。それにさっきのあなたの話を聞いたらもっと我慢できなくなったわ。どれだけ激しく私を抱いてくれるのか楽しみにしてるわよ？」

「ははは。努力します。」

新一は灰原の言葉に少し苦笑いになってしまったが、またお互い笑顔になり強く抱き合った。

二人だけの幸せな世界。  
お互い意地を張りながら、お互い強がりながら、でもお互い弱い部分ももちながら、それを二人で補いながら二人は幸せな日々を送っている。

~~~~~

その頃、服部は大阪へ帰るため駅に向かっていた。

「いやーあのちっこい姉ちゃんには参ったなー。まさかあんなには  
つきり言つとは。」

くさつきのお玄関

「どうなんやちっこい姉ちゃん？ホンマはからかってるだけとちやうんか？」

「は……ない。……るわ。」

「何てー？すまんもつかい言ってくれんかあ？」

「初めから好きっていう言葉だけで済むような気持ちじゃない！もうおかしくなりそうならい愛してるわ！」

～回想終了～

「でもあんだけモノはつきり言う女やったら工藤にピッタリかもなあ。あいつ奥手やし。」



まあ服部も人の事は全く言えないぐらい鈍感で奥手なのだが。

「さて土産でも買つて和葉んとこにでも持っていくか。」

### 13・恋と愛の計りかた（後書き）

ありがとうございました！

何だかあまりストーリーもしっかりしていません。

何か感想などがあればよろしく願います。

予想外の言葉（前書き）

久しぶりの更新です！私は毛利小五郎を買いかぶりすぎなんですよか？笑

## 予想外の言葉

「あー。しっかし暇だなあ。何もすることねえよ。何か事件起きねえかなあ。」

休日の昼時からため息をつきながらこんな物騒なことを言う人間は一人しかいないだろう。

「暇暇うるさいわね。何も事件が起こらないのは良い事じゃない。」

横でうつとしそつな顔で灰原が新一を睨みながらつぶやいた。

「そんなに暇ならちよつと今日の晩御飯のオカズ買ってきてよ。」

「別にいいけどよ。何だよ一緒にいかねえのかよ?」

「ちょっと今日は用事があるのよ。じゃあ頼んだわね。私はしばらく地下にいるから。」

そういつて灰原は地下室に消えていった。

「何だよ用事って。まあ最近遅くまで研究してるわけでもねえから別にいいけどよ。じゃあいくか。」

新一は少し灰原のことを気にかけてながら阿笠邸からいざ買い物に出かけた。

「ふー。もうすぐ完成するわ。今回はかなり自信作だわ。」

灰原の薄い笑みを浮かべながら出来上がりつつある薬を手にとった。

~~~~~

「えーと。ジャガイモ、ニンジン、玉ねぎに肉か。ははー。わかりやすいねえ。」

「今日は完全にカレーだな。」

新一は何故か声が重なったので驚きながら後ろを振り向くと少し久しぶりに見える人物が立っていた。

「げげっ！おっちゃん！」

「何がげっだ！この探偵坊主！」

小五郎とは毛利探偵事務所を出て以来、久しぶりの再会だった。会いにいこうとは何回か考えたのだが、何を話せばいいか今いちわからず結局会わないまま時間が流れていき、余計会にくくなってしまうって。

「ははっ。久しぶりです。毛利探偵。じゃあ俺は買い物中なんで。」

「おいちよっど待て！」

~~~~~

（はあ。俺は買い物にきただけなのに何をやってんだ。）

そそくさと退散するつもりだったが、結局捕まってしまう、今は何故か公園のベンチに二人で座っているという奇妙な状況に陥っていた。

「お前、さっきから何なんだその態度は？何か俺に気まずいことでもあんのか？」

「いや特にはないです。はい。ただまあ何となく変な感じなんで。」

「まあ確かに今でも不思議に思えて仕方ねえよ。おめえが探偵坊主なんてなあ。」



「すみませんでした。ずっと騙してた上に家でお世話にもなって……それに蘭の事も。」

新一は何だかんだで蘭をずっと待たせてしまったことがずっと心残りだった。彼氏と幸せそうにしていると噂は聞いているが、蘭の心をずっと縛っていたのは事実である。

「いや、蘭の事や今までの事は別にもういい。それより俺が聞きてえのはお前自身のことだ。」

「俺自身？」

新一は小五郎が何を自分に聞きたいのかよくわからなかった。てつきり蘭の事や事情を隠してたことを怒られるものだとばかり思っていたからである。

「お前、何で小さいままなんだよ？蘭に正直に全部話して俺の家を出ていった。てーことはお前が巻き込まれていた事件はもう解決したんじゃないのかよ？」

「確かに事件は解決しましたよ。」

「時期的なもんからするとお前が関わっていたのはあの例の巨大組織をFBIが日本で壊滅させたって事件だろ？で、お前はあの日家にはいなかった。てーことはきつとお前の事だから現場にでもいたんだろ。その時に薬かなんかは見つけれなかったのか？」

（鋭いじゃねーかおっちゃん。）

新一は小五郎の推測が全体的中していることに少し驚いていた。

「そのとおりです毛利探偵。現在、俺の体を元に戻す薬はありません。ある研究者に作ってもらってはいますが、なかなか難しいみたいです。」

「あの哀って女の子か？」

「なっ!？」

「あの子もお前と同じだろ？それにあの雰囲気からするとかなり深く事件に関わっていたんじゃないか？」

（おいおいどーしたんだおっちゃん!？何でこんなに鋭いんだよ!）

「いやっ、何ていうかまあその通りなんですけど。…ていうか何でわかったんですか？」

新一は心底不思議そうに小五郎に問いかけた。いつもだらしなかった迷探偵とはちがう。目を合わせると心の奥底を見透かされそうになるような感覚を覚えた。

「まあ何だ。名探偵の勘ってヤツだ。だーはっはっはー!」

「勘って言われても、そんな適当なものでわかるようなことじゃ…!」

「んー？お前ならわかるんじゃないか？探偵の勘ってやつを。」

「ふっそうですね。失礼しました毛利探偵。」

「ところで本題なんだが、お前今一人で住んでんのか？」

「えっまあそうですけど。もう隠れる必要もないですし普通に自分の家で一人で住んでいます。」

本当は。新一が灰原のいる阿笠邸に、灰原が新一のいる工藤邸にほぼ毎日行き来しており、一人で過ごす時間などほぼないのだが。

「……別に戻ってきてもいいんだぜ。お前がそんな姿でいるうちは江戸川コナンのまんまでいいんじゃないかねえのか？まあ蘭とは多少変な空気になるかもしれねえけどあいつならわかってくれるだろ。」

そう言つて新一を見る小五郎の目はスケベでずぼらならしめない中年の目でもなく世間に騒がれている名探偵の目でもなかった。それはまさしく父親が子を見るような目であった。

「……おっちゃん。」

予想外の言葉だった。

予想外の言葉（後書き）

ありがとうございました！

ちよっと小五郎がキャラ崩れてますね。何か小五郎がいい感じになるシーンが好きなんですよね。

久しぶりの続きものなので次もよろしくお願いいたします。

君の為に生きてゆく(前書き)

もう遅くなって申し訳ありません。更新です。



## 君の為に生きてゆく

小五郎から予想外すぎる言葉をかけられた新一は深刻な顔をしながら帰路へとついていた。

~~~~~

「まあ、何だ！別に無理に戻って来いって言うてるわけじゃねえ。お前が気が向いたらたまには家にこいってこった！」

「はっ、はあ。」

「じゃあ俺は帰るからな。お前も気をつけて帰って、おっと。高校生にこんなこと言う必要はねえな。じゃあな探偵坊主。」

~~~~~

(おっちゃん。何であんな事を…)

新一は小五郎とのやりとりを思い出しては深くため息をついていた。

「どづしたのよ？何かヤな事でもあったの？」

「えっ!？」

新一は誰かに声をかけられたと思い、ハッと後ろを向いた。

「あなたがこんなに近くに接近するまで気がつかないなんて珍しいわね。」

「灰原。どうしたんだよ？」

「買い物に出たっきりいつまで経っても帰ってこない恋人を心配して近くを探してるんだけどあなた何か心当たりないかしら？」

灰原はニヤッと意地悪く笑いながら新一に問いかけた。新一はそのいつも通りの口調に苦笑いこそしたが、最近はこのやりとりが妙に落ち着いた。この口調こそが灰原哀だからである。

「悪かったな、遅くなって。さあ、帰ろうぜ。腹へっちまったな。」

そう言いながら新一は灰原の手をギュッと握り、前に歩き出した。

「あら。自分が遅くなったくせに自分勝手なのね。」

灰原は憎まれ口を叩きながらも繋がれた手を握り返し、新一と共に

前に歩き出した。

~~~~~

「ふー。腹いっぱいだけ。やっぱりおめえ、見かけによらず料理うめえな。」

「あら。ありがとう。あなたも見かけはチビのくせによく食べるのね。」

最近はそのような冗談を言い合いながら、夕食後はいつも二人で寄り添いながらまったり過ごすのが日課となっていた。

「ねえ。今日どうしたのよ？帰り遅かったし何かあったんじゃないの？」

「えっ？いや別に何もねえけど。」

「あなた嘘つくのと誤魔化すのはあんまり上手くないんだから早く言ったほうがいいわよ。」

「えっ！あーもうわかったよ。まあ本当に何もねえよ。久しぶりに蘭のおっちゃんに会っただけだよ。」

「毛利探偵に？」

「あーそれだけだよ。久しぶりだからちよつと話込んで遅くなったんだよ。」

新一は嘘ではないが真実を話さなかった。別に隠すほどの事ではなかったのだが、何となく言いたくなかったのである。ただその心情を灰原は見逃さなかった。

「それで？戻ってこいよとか言われたの？」

「なっ！何でわかるんだよ！？」

「あなたの顔を見ればすぐにわかるわよ。だいたいあなたは推理してるとき以外はすぐに顔に出るもの。」

「ははは。(いやお前が鋭すぎるっていうのもあると思うけどな。)  
まあその通りだ。もちろん今さら毛利探偵事務所に戻る気はねえんだけど…。」

350

「ねえんだけど?」

「おっちゃんの真理がわかんねえんだよな。蘭も幸せそうだし、俺があそこに戻る理由がわかんねえんだ。」

灰原はそう言って頭を掻いて困っている新一を見てため息をついた。

「あなたは本当に人の気持ちに鈍感ね。そりゃ今まで幼なじみの蘭さん以外には女の影がなかっただけあるわね。」

灰原は馬鹿にしたような目で新一を見た。

「何だよ灰原その言い方は！じゃあ教えてくれよ！おっちゃんは俺に何で戻ってきてほしいんだよ？」

「そのままの意味よ。」



「はあ？」

何言っただよこいつ。みたいな顔をして新一は灰原に聞いただけだ。

「そのままってどのままだよ？」

「だからそのままよ。ただあなたに戻ってきてほしいから戻ってこいって言ってるのよ。」

「何で戻ってきてほしいんだよ？」

「あなたは…本当に。そんなのあなたの事を好きだからでしょ。きつと一緒に過ごした時間の中で毛利探偵はあなたの事を本当の息子みたいに思ってたんじゃないかしら。」

「おっちゃんが…俺の事を。」

「心当たりがないわけじゃないでしょ？あなたは毛利探偵に本当に愛されていたはずよ。」

「そうか。だからか。だからおっちゃんはあの時あんな目を。」

新一は思い出していた。別れ際に父親のような目で俺を見ていたことを。

「どうするの？戻るの？まああそこにいるほうがあなたの好物の事件にも出逢えるかもね。」

新一はニヤッと笑って灰原を見て答えた。

「いや戻んねーよ。戻るわけねーじゃねーか。」

「いいの？毛利探偵淋しがるわよ。」

「あー。これからはこまめに顔出すよ。確かに出て行ってから一度も訪ねてなかったからな。そうだな。時々また一緒に飯食ったりしてえな。」

「…そう。まあ確かに蘭さんの事もあるし軽く戻るっていうのもね。」

「蘭のこといいけどよ。それよりお前。」

「何よ？」

「お前は俺が出ていっても淋しがってくれねえのかよ？」

新一は灰原に真険な顔をして聞いた。

「何よ？どついつ答えを期待してるのかしら？」

「俺はお前の為に生きていくよ。だからどこにも行かねえよ。」

「嬉しい」と言ってくれるわね。」

新一と灰原。二人の絆は時がたつ毎に強くなっていった。



君の為に生きてゆく(後書き)

ありがとうございます。何かグダグダですがまた頑張っていきたいと思います！

## 未来に進む際は君と（前書き）

久しぶりの投稿です。短く中途半端なところで終わっていますが、すみません。



## 未来に進む際は君と

「だからおじさん。すごく嬉しかったんだけどやっぱり遠慮しとくよ。」

新一は毛利小五郎とバツタリ再会した日から二日後、毛利探偵事務所に久しぶりに訪れていた。理由はこの前の小五郎の言葉に返答するため。

小五郎からの温かい言葉は凄く嬉しかったが、やっぱりまた一緒に暮らすっていうのは出来ない。俺が本当は新一だからとか蘭との事があるからっていうのを抜きにしても。それに俺はこの二人をずつと騙してたんだ。

小五郎は新一の言葉を聞いてふうーっため息をついた。

「まあおめえならそう言うと思ってたけどよ。ただ前にも言ったがたまには顔出せよ。俺達にはおめえを心配する権利があるんだからよ！なああ蘭！」

そう言つて小五郎の横で黙つて話を聞いていた蘭に小五郎は話を振つた。

「そつよ新一！いくら隣に博士や哀ちゃんがいるからつて頼りつきりでダラダラ生活していると体壊しちゃうわよ？本当は高校生でも体は小学生なんだから！」

蘭は新一に半分怒つたような表情で言つた。

相変わらず口うるさい奴。この口うるささに何度も助けられてきたが。

「わーつてるようつせーなあ相変わらずおめえは！」

新一と蘭にとってはいつも通りのやりとりだったがそれを聞いたチヨビヒゲは黙つていなかった。

「てめえこのガキヤ言うに事欠いて俺の娘にうつせーとは何だ！？蘭が心配してんだろつがこのくそ坊主！！」

小五郎は新一と蘭のやり取りを聞いて鬼の様な形相で新一を怒鳴り付けた。

「はいー！すみません！蘭さんご心配ありがとうございますー！」

新一は頭を深々と下げ、小五郎と蘭に謝った。

今に始まったことじゃないがこの家族は本当に強い。

「まあいい。とにかくこれから困ることもあるだろーから遠慮せず  
に言ってくんだぞ！」

「わかりました。本当にありがとうございます。おじさん。じゃあ  
そろそろ失礼します。じゃあな蘭。」

「おい待て探偵坊主！」

新一は「何です？」と言いながら振り返った。

「おめえは騙してなんかねえぞ！」

その言葉に俺はハツとした。ずっと心に引っかかっていたことを言  
ってくれたのである。

「ありがとうございます。」

そういつて新一は事務所をあとにした。小五郎が本当に自分の事を心配してくれていたことを実感しながら新一は事務所を後にした。

「意外だね。お父さんがそこまで言うなんて。でも最後の騙してないってどういう意味？」

蘭は最後のやりとりがちょっとわからなかったので小五郎に尋ねた。

「けっ！別に心配はしてねえよ。ただちょっと気にかかってただけだよ。最後のはあいつに余計なこと考えさせねえようにだよ。」

「余計なことって何よ??」

蘭は小五郎の言葉に疑問を浮かべながら尋ねた。

確かになぜか言動一つとっても小五郎は新一を異常といつても言い過ぎではないくらいに心配している。

本当の小学生ならまだしも相手は新一だ。

「大丈夫だよ新一なら。隣には博士や哀ちゃんもいるし。そんなに生活には困らないと思うけど。」

「バーカそこじゃねえよ。俺が言いてえのはあいつが俺達に対して申し訳なく思ってたんじゃないか？」

「何だよ？」

「いいか？あいつは俺たちと一緒に住んでる時は自分のこと何も言わなかっただろ？」

「そうね。でもそれは私たちが心配させないために・・・」

「だーからー。あいつからしたら俺らを騙してたっていうふうには考えねえか？ずっと本当の事を言わずに小学生の演技をし続けて俺らと暮らしてたんだ。そのへんの罪悪感はあるんじゃないか？」

蘭はそこまで言われてハツと気がついた。確かにお互いすっかり前を向いて進めているとは思う。でも新一にはそんな感情は持つてほしくない。新一にも目一杯幸せになってほしい。

「そういうとこ気にするのもまあ新一らしいといえばらしいんだけどね。今度会ったときご飯食べにきてくれるように誘ってみるよ！コナン君は私たちの家族だもんね！」

蘭は小五郎に笑いながらそう言った。

未来に進む際は君と（後書き）

ありがとうございました！途中で違う話に早くいきたくなり、正直出来は悪いです。

次回も頑張ります！

#### 14・夢幻の如く(前書き)

話をガラッと変えて基本に戻りました。

今後こんな感じで行きたいと思います。



## 14・夢幻の如く

「随分ふやけたツラになってるじゃねえか。・・・シエリー。」

久しぶりに組織のコードネームで呼ばれた私は心臓を拳銃で貫かれたような痛みを覚えた。

「なっ！・・・なぜあなたがここにいるの！？あなたはあの時あそこで死んだんじゃ・・・。」

私に話しかけていたのは少し前まで私が一番恐怖していたあの男だった。長い銀髪とあの冷たい目を私は忘れるはずがなかった。

「なぜこんな所にいるのかは俺も聞きてえなあ！シエリー。お前はこんなぬるい所で楽しく生きていけるような女じゃねえだろ？お前の作った薬で組織が何人の人間を消したと思ってる？それを帳消しにして組織を抜けるっていうのは虫が良すぎるんじゃないか？シエリーよ！」

あの男はニヤリと笑いながらそういつて黒い銃口を向けながら私に問いかけた。人を笑いながら平然と殺すことができる。そんな男だったこいつは。

「そうね。確かに私は決して許されるような人間ではないわ。遠慮なくその銃で私の頭を撃ち抜いて結構よ。」

私はニヤリと笑みを返しあいつにそう言った。殺されることにはとつくに覚悟は出来ている。今さら命を惜しいとはさらさら思わない。むしろ殺されて当然の人間。そこに一切の疑問も不服も私にはない。

ただ……。

「ただ……。私のっ！私の周りの人たちは絶対巻き込まないで！消されるのは私だけでいいはずよ!？」

そう。私なんかの為に傷ついていい人間なんているはずがない。それにもし、あの人に何かあれば私は……。

「ふんっ。シエリーよ。そいつは聞けねえ相談だなあ。何を甘いこと言ってるんだ？」

「お願いっ!!お願いだから彼の命だけは奪わないで!!彼はもと  
もと関係ないはずよ!?!」

「だから聞けねえ相談だつて言つてんだろ?シェリーよ。クックッ  
ク。」

「!?!?!?!あなた、まさか!?!」

私は一番最悪なケースの想像をしてしまった。

ウソでしょ!?!?

彼が死ぬはずなんて。

信じたくはなかったが、この男の口からでる言葉はあまりにも厳し  
い現実だった。

「奴はさっき先に殺つてやったよ。クックック。お前を確実に消す  
には奴が一番邪魔だからな。」

そんな……。そんなことつてあるの?嘘でしょ?私は殺されても  
文句は言えない。でも彼が殺されるなんてあつてはならない。

「さあお前もそろそろ死ぬ。裏切り者とその仲間には死だ。安心しろ。お前のあとにお前の周りの奴も全員消してやる。クッククック。じゃあな。シエリー。」

「いや————!!!!!!」

ガバツ!!

「ハアツ!ハアツ!ハアツ!」

灰原は真っ暗な部屋で目を覚ました。全身には汗がまとわりついていた。

「ゆっ。夢?」

灰原は今までの事が夢だとわかると全身の力が抜け、目を覚ますと同時に起こしていた上半身がまた倒れた。

「ハアツ。ハアツ。ふふ。何て夢なの。まさしく悪夢だね。まだ私の中にはあいつらがいるのね。」

しかしそれが自分の犯した罪に対する償いに少しでもなるのなら喜んで受け入れよう。

半ばヤケになるような自虐的な気持ちでいると部屋のドアがふいに開く音が聞こえた。

「ッ!!誰っ!?!」

灰原は悪夢を見たということもあり、警戒したような声を上げ、ドアのほうを見た。

「灰原!どうした!?!」

何かすげえ声が聞こえたぞ！・・・ていうかおめえどうしたんだよ！？その汗はっ！？何かあったのか？」

ドキツとしながらドアのほうを見るとそこには私の最愛の人が心配そうな顔で私を見つめていた。多分リビングから寝室まで走って来てくれたんだろう。少し息が上がっている。

その顔を見て私は心がようやく安らいだ。私は軽い深呼吸をしてスツと彼の方を見た。

「あらっ。どうしたの？こんな夜中に。もしかして夜這い？私はまだ心の準備が出来てないんだけど。」

私はいつもの口調で彼に言葉を返す事ができた。彼には余計な心配はさせたくない。だから何事もなかったように。・・・

「・・・おめえ誤魔化すつもりなら体の震え何とかしてからにしろよ。」

「えっ？」

急に言われて驚いたが落ち着いて自分の体を見てみた。本当だ。震えが止まらない。なぜなのか。組織に対する恐怖からなのか、自分の犯した罪に対する重圧なのか、理由はわからなかった。

「またあいつらの夢見てたんだろ。」

灰原はその言葉に驚いた。何でわかったのだろう？そんなことを考えていたら急に前が見えなくなり温かいものに体が包まれた。新一が力一杯灰原を抱き締めているのだ。

「どっ、どっしたのよ急に？嬉しいけどあなたにしては大胆ね。」

「バーロー。何言ってるんだおめえ。ちげえよ。お前がその夢を見るのは初めてじゃねえんだよ。」

新一は真剣な表情でそう言った。少し言いにくそうな口調で。

「えっ？どっいづことよそれ？」

「今まで何回かおめえが夢にうなされているところを見てるんだよ俺は。そのときにいつも組織の奴らの名前が出てきてたからよ。だから、あーまだあいつらの事忘れてねーんだなって。今までは目を覚ましてはなかったけどいつも今みてえに汗かいて体が震えてたからよ。」

「へえ。そうだったの。まあ確かに最悪の夢だわ。でも何で今まで目を覚まさなかったのかしら？こんな夢なら目を覚ますほうが普通だわ。」

灰原は我ながら不思議に思った。まあ寝ても覚めても悪夢には変わりはないが。

「だーから今こうして抱き着いてるんじゃないか。」

「はあ？どづいづことよ？」

灰原は顔を少し赤くしながら視線を外してる彼に問いかけた。さすがに今のは意味がわからなかった。まだ新一が顔を赤くしているのは少し面白かったが。



「いやあおめえが前にもうなされている時、どうすればいいかわかんなくてよ。あまりにも苦しそうだから何かすげえ辛くなっちまって一回思いっきり抱き締めたらおめえが落ち着いたんだよ。」

彼ははずかしそうに答えた。

私は寝ているときも彼の愛に包まれていたのね。何で彼はこんなにも私に安らぎを与えてくれるのかしら。

「ふふ。ありがとう、工藤君。またあなたに助けられていたのね。」

「いや別にいいけどよ。それよりもう落ち着いたみたいだから離していいか？」

ふふ。照れるところは相変わらずね。そんな所が愛しくてたまらな

いんだけどね。

「あら。あなたそれでも男なの？一晩中抱き締めてやるから俺の胸で寝るとか言えないの？」

灰原は冗談混じりに新一にいった。まあ半分本気で言っているのだが。

「バーロー。おめえなあ。こんな時に茶化すなよ！」

「いーえ茶化してなんかいいわよ？私はこのままあなたと一夜を過ごしたい気分なんだけどあなたは違うのかしら？」

言い方は素直ではないが一緒にいたいのは事実。彼が愛しくてたまらない。こんな温かい気持ちを教えてくれたのもあなた。

「いや別に嫌じゃないけどよ。とっ、とりあえずおめえ汗かいてっ  
だろ？タオルもってくるからふけよ。なっ！」

新一はどぎまぎしながら逃げるように浴室にタオルをとりにいこう  
とした。しかし灰原はそれを許さなかった。

「女の子が勇気だしてそばにいてって言うてるのに何逃げようとし  
てるのよ。」

「いやちげえよ！だからタオルとりに行くだけだっ！頼む！タオ  
ルとったらすぐ帰って来るから！タオル！」

新一はタオルという言葉をやたらと連呼していた！

・・・？。

（何でタオルにこだわるのかしら？まさか私が汗かいてるのがそん

なに気になるのかしら。)

「私そんなに汗かいてるかしら？そんなに匂うつ？」

「

そういつて半分冗談で灰原は自分の体臭を嗅ぐふりををした。

「いや体臭とかはねえし、別に関係ねえよ。」

「じゃあ何なのよ？  
はつきりしなさいよ！何でタオルにこだわるのよ？」

「・・・笑うなよ。」

新一は観念したようにため息を吐きながらそう言った。

「・・・内容によるわね。」

灰原はニヤッと笑いながら呟いた。経験上、こういう時は大抵想像もしないほど変な回答が返ってくる事が多いのである。特に新一が困っている場合はかなりの確率で。

「いや、まあほら。さっき言ったろ。おめえがさっきみたいに夢見てよ、うなされて汗かいたりしてるところを何回か見てるって。」

「言ったわね。」

「んでさっきみたいに俺は今までおめえを落ち着かせたいから抱き締めていたと。」

「そう言ってたわね。でっ？何なのよ？」

灰原はなかなか核心にせまらない新一を見て少しイライラしていた。

「いや、だからさ。」

「もうはっきり言いなさいよ！」

「わあつたよ！おめえが汗かいてる姿がむちゃくちゃ色っぽくてたまんねえんだよ！だから早く拭いてくれて言ってるんだよ！」

灰原はあつけにとられたような顔で真つ赤な顔でふてくされている新一を見ていた。何を言ってるのこのバカは、とでも言いそうな顔で。

しかし灰原は心の中でニヤリと笑い、確信した。今日も主導権は私だと。

「ふうん。よくわかったわ。あなたが私の意識のない時でも私をイヤらしい目で見えていたってことがね。」

「バーロー！ちげえよ！それはたまたま・・・、」

「もうタオルはいいからこっち来て。」

そういつて苦い顔をしながら近づいてきた新一をベッドに座らせて、灰原はその上にまたがるように座った。

「おいっ灰原！何してんだよ？」

「ふふつ。えっちな目で私の事見てたくせに今さら何言ってるのよ？それよりさつき汗かいてる姿が何とかって言ってたけどどういうこと？何がたままないのよ？」

灰原は新一の肩に手を回し、いつもの意地悪そうな笑いかたで意地悪な質問をした。

「おめえほんとドSだな。」

「そうかしら？寝てる女の子にイヤらしい視線を送るあなたに言わ

れたくないわ。」

(しつげえなこいつ。だから言っの嫌だったんだよ！)

「あなたには聞きたいことがいっぱいあるんだから今夜はそばにいなさいよ?。」

(まあいいか。元気になってくれたんだし。)

辛いことがあっても二人なら支えあって生きていける。そんな小さな事が大きな幸せになるのだと思います。



14・夢幻の如く(後書き)

ありがとうございました！

シリアスからほのぼのな感じで。

また頑張ります！

15・いかなる時も君に愛を（前書き）

少し長いですかね？

風邪ひいてるんで書きました。

## 15・いかなる時も君に愛を

灰原哀は激怒した。

この日、灰原はいつになく機嫌が悪かった。普段から機嫌が良いとは決して言えないが今日に限っては抑えきれない怒りを露にしていたのである。

その原因は当然新一がらみの事なのは言うまでもないが。

（1時間前）

「それちょっとどういう事あなた!？」

阿笠邸の電話口で灰原はめずらしく大きな声を出していた。普段は本を読んだり研究に没頭したりで、もの静かにしているので端で見ている阿笠博士も思わず持っていた発明道具を床に落とすくらい驚いている。

「だから何回も言っただろうが！今日は会いたくねんだよ！て  
いうかしばらくは会わねえ！だからおめえも会いにくるんじゃねえ  
ぞ！わかったな！」

「だから理由を言いなさいよ！いきなり電話してきたと思えばその  
態度はないんじゃない！？」

「理由なんか特にねえよ！わかったんならもう切るぞ！」

「何その勝手！結構よ！声も聞きたくないわ！」

ガチャン！！！！

……とこつとこつ事である。

灰原の怒りは時間が経過してもとどまることを知らなかった。二人が正式に付き合い始めてしばらく経つが言い争いや喧嘩などは今までしたことがない。

今さらだが、二人とも見た目は子供だが頭脳は大人。些細な理由では感情的にはならない。

だからこそ急に電話をかけてきて悪態をつかれたので灰原はご立腹なのである。

「まつ、まあまあ哀君。新一にもきつと何か理由があるんじゃないかのう。じゃからそんなにいつまでも怒っておらんで・・・」

とまで言った所で灰原は阿笠博士をギロリと睨み付け、ドスの聞いた声で言い返した。

「博士は黙ってて!!」

「はい! すいません!」

(ほつら新一。案の定哀君は怒つとるぞお。全くこっちはいい迷惑じゃ。)

博士はため息をついた。

実は阿笠博士は知っていたのである。なぜ新一が灰原に会いたがらないか、会おうとしないのかを。

しかし相手は灰原哀。バレるのは時間の問題だと確信していた。

(だいたい哀君相手に隠し通せる訳がなかつ。もう知らんぞわしは。)

「なつ、なあ哀君。」

「何よ?」

博士は恐る恐る灰原に呼び掛けたが、灰原は依然として不機嫌オラMAXである。

「哀君のことじゃから本当はもうわかっておるんじゃないのか?」

「何が?」

「いや新一の事じゃよ。」

「だから何がよ!」

（おー怖いのが。全く何て迫力の子供じゃ。）

阿笠博士は完全にびびっていた。こんなにも怖い女性をよく怒らせるなど新一に少し感心しながら。

しばらく博士が何かを言いたげにモジモジしているとそれを見ていた灰原は「ハァー！」と大きくため息をついた。

「あつ、哀君？」

「ええ。最初からわかっていたわよ。当たり前じゃない。私を誰だと思っっているのよ？」

灰原はそう言ってようやく少し笑みを見せた。まだまだ機嫌が直ったとは言いがたいが。



「そつ、そつなのか哀君！では新一の所に行つてやつてくれるか？」

「そつね。私にあんな態度をとつたお仕置きもしなきゃいけないしね。」

そつ言いながら灰原は工藤邸に行く準備をしていた。

「いやいやすまんのお哀君。でもなぜ気がついたんじゃ？」

阿笠博士は不思議そつに灰原に問いかけた。あんなに電話で怒っていたのになぜ原因が見抜けたのか。

「バカね。最初からわかっていたわよ。彼が私に何か隠しているってこともそれを博士が知っているってこともね。」

そう言つて灰原は阿笠邸を出ようと玄関まで歩きだしていたが途中で止まり博士の方に振り返った。

「じゃあ行つてくるわ。多分今日は帰らないと思うから。あっそうそう。夕飯は工藤君と一緒にになって私に隠し事をした罰として自分で何とかしてちょうだい。」

それだけ言つて灰原は出ていった。

「そりゃないじゃろ哀君。トホホ。」

しかし博士はしばらく何かを考えピンとひらめいた。

「いや待てよ。ということとは久しぶりにわしは自由に好きなものを食べれるということじゃな！」

普段は健康とメタボ対策の為、徹底したカロリー計算をされた食事を灰原が作っている。他ならぬ博士のためを思っている事なのだがそのメニューは大柄な博士にはいささか物足りなかつたのである。

「よし！今日は奮発して出前でもとるかの！」

博士はルンルン気分ですう言った。翌日、出前のお皿を灰原に見られ、また怒られるとも知らずに。

一方、工藤邸。

ゴホッ！ゴホッ！

「あー。ちきしょう頭が痛え。完全に風邪だなこりゃ。」

そう。新一は風邪を引いていたのである。体が小さくなる前からちよくちよく風邪を引いてはいたが、今回は外に出る気力が出ないくらい参っていた。

「ハア、ハア、ハア。ちきしょう。医者に行くにも体が動かねえぜ。」

小さい体なので体力が伴っていない。余計に風邪がつらく思えたのである。

「あー。灰原何してんだろなあ。やっぱり怒ってんだろなあ。謝って許してくれんのかなあ。」

何て意識朦朧としばがらつぶやいていると部屋のドアがガチャッと開く音がした。

「許さないわよ。」

「はっ、灰原。」

新一は体の倦怠感で素早くドアの方へ振り向くことが出来なかったが、声を聞いてそれが誰かはすぐ理解できた。

「ふふ。いいぢまね。」

「何で来たんだよ。来るなつつつたる。」

来るなどは言ったが、いざ来てしまうと追いつき体力もない。何より来るなどは言ったが、それでも来てくれたことに少し喜びを感じていた。

「あなたの無様な姿を見に来たのよ。大体あんな電話で私を誤魔化せるとでも思ったの？」

灰原は新一が寝ているベッドに腰かけ、汗で乱れている新一の髪を

撫でながら言った。

「誤魔化せるとは思わなかったさ。おめえが簡単に引つかかる姿なんて想像も出来ねえよ。」

「じゃあ何なのよあの電話は。正直第一声であなたが体調不良だつてことくらいわかったわよ?」

それを聞いて新一はハハッと苦笑いをしながらゆっくりと話をし出した。

「いやまあ心配かけたくなかったのが一番の理由なんだけどよ。おめえは優しいからさ。風邪をひいたって言えば絶対こうやって家に来ると思つてよ。でも風邪をおめえにうつすのだけはイヤだったんだよ。だから家に来させねえようにするにはおめえを怒らせるのが一番いいかなと思つただけ。まあ今考えりゃガキみてえな方法だな。」

「全くガキそのものだわ。あなたのおんな声聞いて私が気づかずに言われるがまま怒って家に来ないとも思ったのかしら。」

灰原は呆れたようにそう言った。

「その割には結構怒ってたじゃねえか。博士もビックリしてただろ。」

「あれはあなたと博士の演技に合わせたのよ。まああなたたちの白々しさには腹が立ったのも事実だけど。」

灰原は博士のビビリ具合を思い出して少し笑顔を浮かべた。大の大人が子供に怒られてシュンとしている所が面白かった。



（博士に少し悪いことしたかしら。）

そんな事を考えていると急に手を掴まれた感触がした。ふと下を見ると新一が灰原の手を掴んでいたのである。

「どうしたの？どこか苦しい？」

「灰原。お願いだ。今日はずっとそばにいてくれ。」

新一は灰原をすぎるような目で見つめながら呟いた。

「あらあら。風邪をひくと随分甘えん坊さんになっちゃったのね。」

灰原はいきなり言われて少し驚いたが、胸をくすぐられるような感

覚だった。

「うっせーバーロー。あーだから来てほしくなかったんだよ。」

「ふふ。甘えちゃうから？」

「はは。何かおめえ見ると将来俺は絶対尻に敷かれるって確信で来るぜぜ。」

「あら。それってプロポーズ？」

「ちげえよバーロー。．．でもずっと一緒にいたいのはホントだぜ。」

「

そう言いながら新一は灰原の背中に手を回して抱き寄せた。

「あらあらホントに甘えん坊さんみたいね。さっきの電話とはえらい違い。」

そう言いながら灰原も新一の背中に手を回してきつく抱きしめた。

（私もよ工藤君。ずっとあなたのそばにいたい。あなたが辛いときも悲しいときも、それを一番に見てほしいのよ。あなたとなら幸せな未来を確信できるわ。愛しくてたまらないのよあなたが。）

「灰原。電話できついこと言ってごめんな。」

「いいわよもう。別に今さら怒ってないわ。」

灰原はやさしくそう言って新一の頬にキスをした。

「なっ、何すんだよ！」

新一は不意をつかれたので驚いた。

「ふふ。何だかあなたの気持ちわかるわ。あなたが汗かいてる姿、正直たまらないわ。」

灰原は笑みを浮かべながら寝ている新一を見つめた。

「はは。おめえも変態だな。」

新一は恥ずかしい思いをしたあの日の夜を思い出していた。

「ねえ工藤君。私今日だけは体が小さくてよかったと思うわ。」

「え？何でだよ？」

「ふふ。体が大人だったら私確実に今あなたを襲ってるわ。」

「そんなの今さらだろ。」

新一は一瞬ドキッとしたが、よく考えると別に変な考えではないように思えた。

「どっぴいっ事よ今さらって?」

「いや、だって灰原。もし体が大人だったら、俺、おめえのこと毎日襲ってるぜ。」

「えっち。ふふ。早くそんな日がくることを願っわ。」

「バーカ。」

「さっ、そろそろ少し寝れば？その間にご飯でも作っておくわ。それとも甘えん坊の小学1年生のコナン君はお姉さんと一緒に寝たいのかしら？」

灰原は茶化すように新一に言ったが、新一は風邪のせいもあって反論することができなかった。

「・・・一緒に寝てくれよ。そばにいろって言ったろ。」

「はいはい。こまった子ね。」

次の日、新一は全快し、無事灰原にも風邪はうつらずに済み一件落着だった。

ただなぜか博士に風邪がうつり、ダウンしたことを除けば。

「哀く〜ん。苦しいんじやあ。」

「知らないわよ。」



15・いかなる時も君に愛を（後書き）

ありがとうございました。

風邪が流行っているのでそのネタで。

次もよろしくお願いいたします。

## 16・白い吐息と甘い声（前書き）

すみません何を書きたかったのか全くわからない結果になりました。

## 16・白い吐息と甘い声

「寒いわね。」

灰原は白い息を吐きながら自分の家となっている阿笠邸に向かって不機嫌そうに歩いている。

12月中旬、秋が冷たい風の到来とともに終わりを告げ、冬に突入する。

「何でこんなにも寒いのかしら。夏のあの暑さも相当うんざりはしたけど。」

灰原哀はとある事情で自由な人生を送ることが出来なかった。なので外を出歩くというごく普通のことでも厳しく制限されていたため、四季の寒暖の移り変わりに少し慣れていなかった。

「だーれだ!？」

歩きながら四季の移り変わりにクレームをつけていたとき、急に後ろから目に手をあてがわれたと思えばよく聞き慣れた声でした。

灰原はこんなベタで茶目つ気たつぷりのイタズラは好きな方ではない。むしろ瞬時に苛立ちが募り、イタズラをした相手に氷のような視線を送るタイプである。  
ただ1人を別として。

「あら。寒い夜を寂しく1人で歩いている女の子を襲おうとしている野蛮な探偵さんかしら？」

口調と言葉は相変わらずだが、自分の意識が最愛の人、工藤新一を感じた瞬間幸せな気分に入れられ、思わず笑顔が零れた。

「バーカ！何だそれ？それよりおめえこんなクソ寒いのにこんな時間に何してんだよ？寒いのが嫌いだったよなあ？」

新一はフツと笑う灰原の笑顔に一瞬クラツと来てしまったが、気を取り直して疑問に思ったことを問いかけた。

確かにこんな時間帯に灰原が一人で歩いている姿は珍しい。寒いのが嫌いなのだからなおさらのことである。

「別に。最近ちよつと家にこもってばかりだったから気分直しに散歩してただけよ。でもやっぱり寒いのは苦手だわ。もう散歩は終わり。さっ帰りましょう?」

灰原はそう言って新一の手を握った。

「おっ、おう。そうだな。じゃあ帰るか!つとその前に・・・」

急な灰原の行動に新一は驚いたが、あまりの可愛さに思わず抱き締めてしまった。

「何よ？」

「いや、おめえ手も冷てえし寒そうだったから暖めてやるつもり  
てな。」

新一はそう言っつてニカっつと笑った。

「あら。優しいのね。まっそれが本当の理由だったらだけど。」

「ハハっ。まあいいじゃねえか。よし！じゃっ帰るか！」

新一は改めて言い直し、やっと帰路についた。  
繋がれた手は離さずに。

~~~~~

「ありがとう。でも夜は本当に寒いわね。この前のあなたみたいに風邪ひくのもバカらしいしもう無意味に出歩くのはやめるわ。」

「おいおい。風邪はすぐ治ったんだしあんまり言うなよー。まあでも大丈夫じゃねーか？バカは風邪ひかねーって言う……。」

「何が？」

新一が少しばかりの抵抗を見せようと反撃した直後、冷たい視線と言葉が突き刺さった。

「……何にもありません。」

「フツ。コーヒーでも飲んでく？」

「おう！悪いな！」

口では勝てないと改めて痛感したがこんなやりとりも幸せと感  
じましてくらい新一も灰原が好きだった。

~~~~~

「おー暖まるねえ。」

「そうね。いつも以上に美味しく感じるわ。」

二人は阿笠邸のソファーに並んで座りながら灰原が作ったホットコ  
ーヒーを味わっていた。

「あれ？博士はもう寝たのか？」



「ええ。最近忙しいらしいしわよ。少しずつ発明を認めてもらえる人が増えてきてるみたい。何を作ってるのか全くわからないけど。」

「まあ技術はあんだけど何かずれてる発明品が多いんだよなあ。俺は随分助けられたけど。」

灰原と新一はしばらく当たり障りのない会話を楽しんでいた。博士の事。学校の事など。だが新一はさっきから一つ灰原に聞きたいことがあった。

「ところで灰原。さっき聞こうと思ったんだけどおめえ何で最近部屋にずっとこもってんだ？まあ研究してるってことはわかってるしおめえの顔見りゃ別に寝不足ってわけでもなさそうだからそんな心配はしてねえけどよ。」

「……私もあなたに聞きたいことがあるんだけど。」

そう言って灰原は新一に寄り添って手を握った。

「なっ何だよおい？」

新一は灰原の突然の行為にまたしても驚いてしまった。最近素直になってくれたとは思っていたが、今日は特別素直のような気がして少し違和感を感じていた。

「クリスマスは私と一緒に過ごしてくれるのかしら？」

またしても意外な一言だった。確かにもうすぐクリスマス。そろそろ誘おうと思ってた所ではあるが、まさか灰原のほうから言ってくるとは思いもしなかった。

「おっ、おう。勿論じゃねえか。俺は一緒に過ごしたいぜ。」

「そう。よかったわ。ありがとう。私も工藤君と一緒に過ごしたいわ。」

そう言っつて灰原は新一に最高の笑顔で微笑んだ。

「何かおめえ今日ちよつよ素直すぎねえか？」

いや、すげえ嬉しいんだけどよ。何ていうか女っぽいつていうか。」

「やっぱりそうよね。自分でもおかしいのはわかってる。でもね。私はあなたの事が好きなのよ？他の人にはどう思われてもいい。生意気だと言われようと、・・・犯罪者だと言われようと。」

「おい灰原！そんな事言っつんじゃね・・・。」

「でもあなたの前では1人の女でいたいって最近思っつようになったのよ。」

何だよこの可愛い女は。これが俺の彼女だよ。

「はっ、灰原ー！」

新一は灰原を渾身の力で灰原を抱き締めた。

「何っ？どうしたのよ急に！？」

「灰原！好きだ！」

「わっ！わかったから離してよ！苦しいわよ！」

「嫌だよぜってえ離さねえ！」

「工藤君。離してくれないと息出来ないんだけど。」

そう言われ新一はしぶしぶ灰原から離れた。

「素直にする度にこの調子じゃ私もなかなか変われないわね。私の努力を無駄にする気？」

少し呆れたような顔をしながら新一を見る灰原。  
それを言われて申し訳なさそうにする新一。

「わっ悪い。でもすげえ嬉しいし、すげえおめえが可愛いよ。」

「ありがとう。工藤君。クリスマス楽しみにしてるわよ。プレイボーイさん。」

「久しぶりに言われたな。でも今の俺は全然プレイボーイじゃねえな。」

「フフ。そうね。さあ、もう夜も遅いわ。そろそろ寝ましようか。」

「おう。じゃあ俺も帰るな。」

「何言ってるの？一緒に寝てくれるんでしょ？」

「えー！マッ、マッかよー！」

「一晩かけて温めて。でも変なトコ触ると殺すわよ！」

16・白い吐息と甘い声（後書き）

ありがとうございます。

なぜ灰原が部屋にこもっていたのかはクリスマスで明かします。



## 17・夢の中の叫び（前書き）

少しシリアスな感じではないでしょうか。

## 17・夢の中の叫び

「雅美さん!!しっかりして!!」

「頼んだわよ。小さな探偵さん。」

「雅美さん!!」

バサッ!!

「ハア、ハア、ハア。またか。これで何回目だよ。」

新一はここ最近眠れなかった。理由は何度も見るこの夢のせいである。

夢に必ず出てくるのは広田雅美と名乗った女性。

本名は宮野明美。灰原哀の実の姉。

体が小さくなってしまうてからすぐに起きたある事件で出会った。

出会いから永遠の別れまではほんのわずかな時間だったがあの時の記憶はまだ鮮明に覚えている。

守りたくても守れなかった苦い記憶。

なぜ今になってこの夢を見るのか。そんな事を考えながらも朝なので学校へいく準備を始めた。

~~~~~

「おはよ。灰原。」

「おはよう工藤君。」

体全身に何とも言えない気だるさを感じながら工藤邸を出た。それとほぼ同時に横に隣接している阿笠邸から1人の少女が出てきた。

名前は灰原哀。元黒の組織のメンバーで工藤新一の体を小さくした薬を作った張本人。

そして組織を倒すために共に戦ったたった1人の仲間です。運命共同体。

そして今は運命によって結ばれた最愛の女性。

「どうしたのよボーツとこっち見て。何か文句でもあるの?」

灰原は何も言わずにただ自分を見つめている新一に少し不愉快そうな表情で問いかけた。

「いや、何でもねえよ。さあ、学校いこつぜ。」

(・・・何か変ね。)

心の中でそう思いながら新一と学校に向かって歩いていった。

通学途中、話した会話は当たり障りのない普通の世間話だった。昨日のサッカーの試合結果と印象に残ったプレー、博士が食事制限を我慢出来ずに夜中にこっそりお菓子を食べていたことが発覚し、説教しまくったことなど。本当に普通の会話しかしていない。

しかし灰原は新一の様子に異変を感じずにはいられなかった。

メガネをかけているので見えにくかったが目の下にははつきりとしたクマが出来ており、話をしているときも表情が少し暗い。疲れているような寝不足のような顔で話の内容が頭に入っていないようだった。

学校に着いてからもその様子に変化はなく、授業もまるで聞いてはいない様だった。

元太や光彦、歩美がいつものように話をしに来ても「おう」「や」「  
そうだな。」とばかり言っていた。

「おう！コナン！何だよ暗えじゃねえか！どうしたんだよ！？」

「どうしたの？コナン君？お腹痛いのか？」

「お体の調子悪いんですか？」

「おう。」

「・・・これである。」

ずっとそんな調子で今日の学校は終了した。

~~~~~

「でっ？あなた一体どうしたのよ？」

あまりにも様子がおかしい新一に堪えかねて灰原は下校後、工藤邸に押し入り理由を聞きに行った。

「どうしたって何がだよ？」

「何がじゃないわよ！そんな勉強しまくってる浪人生みたいな顔して！っていうかあなた最近ずっとそんな感じよね？どんどんひどくなってるわよ。」

新一は灰原に突然まくし立てられ驚いていた。

確かに最近の寝不足でボーッとしていたがそんなにひどい顔していたとは思っていなかった。

でも灰原にはなぜ寝不足なのか説明は出来なかった。自分の姉が死ぬ場面が夢に何度も出てきて目を覚ましてしまうなど絶対に言えるようなものではない。

「何でもねえよ。ちょっと最近夜更かししちゃっててよ。さすがに俺もちょっと辛えから早く寝るよ。」

新一はそう返したが、灰原は新一の話を通じてはいなかった。確かに新一は推理小説の読みすぎやテレビを見たりで夜更かししてしまう事もそう珍しくはない。しかし、それらを理由で夜更かししても次の日は元気に学校にも来ていた。しかし今回は周囲の声や会話の内容もまるで耳に入っていない。こういったケースは自分の意志で夜更かししているのではなく、寝たくても寝れない、またはすぐに目を覚ましてしまい、睡眠状態に体が入りづらいという可能性が高いのである。

「何だよ灰原。その目は。信じてねえのかよ。」

「いーえ。そんな事ないわよ？ただ私はあなたの事が好きだから物凄く心配してるだけよ。」



「ははー。よく言っぜ。怖え顔しやがって。」

新一はジト目で睨み付け、悪魔のようにニヤリと笑う灰原を見て冷や汗をかきながら言い返した。

「あら本当よ？だから今夜はあなたと一緒に寝るわ。」

「はあ！？」

## 17・夢の中の叫び（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

話は出来ているので早めに更新したいと思います。

18・陰ることのない光（前書き）

もっともっと暗くしたかったんですけどなかなかうまくいかないですね。

## 18・陰ることのない光

「あー何でこんな事になってんだよ。」

「あら。そんな事言っつて本当は嬉しいんでしょ？好きな女の子と一緒に寝れて。」

「うつせえバーロー。すぐに寝るからな。邪魔すんなよ。」

「あなたこそ寝たふりして変なところ触らないでよね。この小さい体同士で興奮されても仕方ないし。」

・・そんなやりとりをしてから小さい体の二人には充分すぎるほどのサイズのベッドに二人で入って約15分。

灰原は新一をずっと観察していた。見た所新一は気持ちよく寝てい

るようである。

その様子を見て灰原は安心したが、少し複雑な気持ちになった。恋人同士が二人で一つのベッドに入ってこんなにもすぐに寝てしまうとは。

(まあこの体で何をするってわけでもないけどね。)

灰原はぐっすり寝ている新一を見ながらクスリと笑い、そんな事を考えていた。

「何か余計な心配をしてしまったようね。さっ私もそろそろ寝ようかしら。」

そういつて灰原も安心して眠りについた。

~~~~~

新一に続き灰原も眠りについてから約2時間後。

新一の悪夢は始まった。

「ハア、ハア、ハア。」

荒い息の音で灰原はすぐに目を覚ました。元々眠りが深い方ではないし、今日は新一の眠りを確かめるために来たので最初からぐっすり寝ようなどとは思っていない。

しかしいざ目の前で新一の異常を見て灰原は驚いていた。尋常ではない汗の量と息の荒さ。苦しそうな表情。

「ちょっと工藤君！大丈夫！？しっかりしなさい！」

灰原は苦しそうに悶えている新一の肩を掴みながら問いかけたが返事はない。

「……ち……みさん。」

急に何かを呟いたので起きたのかと灰原は思ったがどうやらちがうらしい。しかし灰原は新一が何を呟いたのかを聞き取ることが出来なかったのもう一度新一が口にしないか顔を近づけて耳をすました。

「まさ・・みさん。」

(ん？何か人の名前のようなね。しかも女性。どんな夢を見てるのかしら。)

「雅美さん。しっかりして！」

よつやくはつきり聞こえた名前に灰原は驚き、同時に胸を刺されるような思いになった。

雅美という名前。これは姉が最後の時を迎えることになってしまった事件で使用していた名前。

「・・・まさか。・・・お姉ちゃんの夢を見てるの・・・?」

灰原は新一が見ている夢の内容が姉の最後の瞬間だと確信した。

(何で工藤君の夢にお姉ちゃんが出てくるの?・・・工藤君。)

「うわぁぁぁ!」

灰原が新一を心配と懐疑な表情で見つめていた中、新一は叫び声と共に目を覚ました。身体中には汗がまとわりつき、息も走った後のように乱れていた。

「くそっ!またかよ。」



新一は灰原が横で寝ていたことも忘れ、また夢にうなされ目を覚ましたことに嫌気をさしていた。

「・・・またって。あなたが眠れないのはこれが原因だったの？」

「はっ灰原！！何でここ・・・ってそうか。忘れてたぜ。・・・ってことはもうバレてるよな。」

「・・・ねえ、どういう事？あなたが寝ながら呟いていた女性の名前。雅美さんって。・・・私のお姉ちゃんの事よね？何でああなたの夢にお姉ちゃんが出てくるの？それに何でああなたはそれで苦しんでいるのよ！？一体どういうことなの？」

灰原は少し取り乱していると言ってもいいような態度で目を覚ましたばかりの新一に問いかけた。灰原にとって姉はこの世で唯一自分を大切にしてくれた人。組織の中でただ一人苦しみ続けていた自分の心の拠り所であった人。

しかし先の事件で組織に殺され、灰原は1人になってしまった。

「わからねえ。ちょっと前からほぼ毎晩明美さんが夢に出てくるようになったんだ。それもいつも同じ場面だよ。」

それがどの場面かは灰原も理解出来ていた。新一が自分に気を使っ  
て口には出さないことも。

「・・・そう。でも大丈夫？あなた相当うなされてたけど。」

そう言つて灰原は新一の手を握つて問いかけた。確かに人が死ぬ場  
面の夢を毎晩見るといふのは辛いだろう。それが自分の姉なので灰  
原は少し複雑な気分になった。

新一は心配そうに手を握っている灰原を無理やり引き寄せ抱き締め  
た。抱き締めた手にあまり力が入っていなかったが灰原は突然の事  
に驚いた。

「どつしたの工藤君？」

「……れなかった。」

「えっ？何て言ったの？」

「すまねえ灰原。お姉さん守れなかった。守りたかったのに。守れたのに。あの時俺がもう少し早く事件の真相に気づいていれば守れたはずだったんだ。……ごめん。……ごめん灰原。」

灰原にとっては衝撃的な内容だった。これまで姉の最後の瞬間というのを詳しく聞かされた事はなかった。ただ事件を起こし最後に口封じに組織に殺されたとしたか。

新一も今ままであまりお姉さんの事は言おうとも聞こうともしなかったので、この話題は二人の間では暗黙の了解でタブーのようになっていたのである。

「工藤君。……いいのよ。もうお姉ちゃんはいないし今あなたがその事で苦しむ必要はないのよ。」

灰原は新一の背中に手を回し抱き締めあった。姉がいなくなっ  
てしまったことで苦しんでいたのは自分だけではないのだと実感しな  
がら。

「あの時、お姉ちゃんは最後にあなたに会えて救われたと思うわ。」

「どうしてだよ。俺は明美さんを救えなかった。きつとお前を守る  
ために罪を犯して苦しかったはずだ。それにも気付かずに。俺は・  
」

「私とお姉ちゃんはずっと闇の中で生きてきた。組織の言う通りに  
生き、外の光を見ることはなく。・でもあなたと会えて光を見る  
ことが出来た。小さくても確かな眩しいぐらいの光を。」

「俺は何もしてねえし、何も出来なかったんだ。何でそんな事を  
お前は言えるんだよ。」

「いつそ助けられなかったことを初めて会った時のよように責めてほ  
しかった。」

しかし灰原は新一を見つめて笑顔で言った。

「私がそうだったからよ。あなたと会えてこの世が変わったわ。真つ暗で決して救われることのない、明けることのない道から救い上げてくれたわ。陰ることのない光を見せてくれた。」

「・・・灰原。」

「お姉ちゃんの代わりに私が言うわ。ありがとう。工藤君。私たちが救ってくれて。」

何より優しい言葉。『ありがとう。』

最愛の人に贈られる最上級の感謝の言葉。

灰原は誰よりも美しく何よりも綺麗な声で新一にその言の葉を贈った。

「ごめんな。・・・ありがとう。灰原。」

「もう謝らないで。あなたは何も悪くない。お姉ちゃんを殺した組織も壊滅した。それでいいのよ。」

「・・・灰原。」

「さっ、もうぐっすり寝れるわね。もう寝ましょ。だから手を離して。」

そう言って灰原は新一の手をつかんだ。

「ありがとう灰原。でももう少しこのままで。」

「あなたは本当に甘えてくるようになったわね。」

耐え難いような苦しい思いをした二人。

そんな暗闇の中を一筋の光が差ししました。

やがてその光は周りを照らし、二人を幸せな未来に導いてくれると  
信じて歩いていくのでしよう

。

18・陰ることのない光（後書き）

ありがとうございます。

クリスマスのお話をクリスマスに書けませんでしたでしたが近々書きたいと思います。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8137s/>

---

名探偵コナン～君を愛しています～

2011年12月25日23時53分発行